

明治三十三年十月出版

71
329

寺石 正路 著

土佐人物傳

編前

上

關 於 土 佐 人 物 傳 所 有 權 版

004814-000-8

71-329

土佐人物傳

寺石 正路 / 著

M30

ACE-1522



71
329

土陽叢書發行に就て

之を聞く、偉人傑士の事績を後世に傳ふると、其人の爲め黄金の巨像を鑄るに勝ると、吾が土佐の地由來歴史に富む而して事績往々煙滅し世人の知慮するの少なき所以のものは蓋し記録等々後世に存せざるに基因せしこと少からざるあり、弊舎聊々爰に感ずる處あり、今般『土陽叢書』を發刊し以て大に土陽の人物事績を網羅上梓せんとす、是れ一は以て故人の美名を顯揚し一は以て後人をして其事實を明瞭ならしめんとす、微力の效す處本より万の一二に過ぎざるも亦鑄鐵の小像を試む

るに近きものあらんか、天下の士夫れ之を諒せよ

土陽叢書 續々發刊に就ては土佐に關する古書御所藏又

は御編纂に御方は御一報被下度早速御相談に罷出可申候

開成舎主謹述

土佐人物傳自序

土佐は舊名を健依別といふ國俗武健を尙び民性擴悍よ
して撲訥文お乏し是を以て世人皆曰く土佐お人物なし
と然も細かお其實際を視るお昇平三百年の間異人奇材
の儕續々として輩出し各一家の學藝を唱へ鳴盛を極む
る者枚舉す可からむ唯惜むらくは國お正史なく文献欠
陥し名聲郷黨お埋没して遂お聞ゆるおき者皆是あり抑
深山大澤は龍蛇勇豹を出し大洋滄海は珊瑚眞珠を産す
斯の東西の廣き百里おして翠巒を負ひ青洋お臨み秀氣
清淑たる土佐國おして豈に一二の魁偉奇傑の士其靈を
受けて生るる者なくして已む可けんや見よ戰國の中葉

南學の一たび開くるや元和偃武の後及び奎運一時の勃興し彼の野中兼山の炳古燿今の大經綸となり其弟友として神道の一派を唱へ海内の儒學を風靡して尊王の大義を明かにしたる山崎闇齋の學術となり闇齋の門下は又分れて數派となり一は京に在りて淺見綱齋等之を唱へ靖獻遺言を著とし士道を扶持し嘉永安政以後志士精神を振興したる鼓吹者となり一を再び土佐に復して谷秦山等之を唱へ敬神忠君の道を講して師弟相磨して同じく國體尊崇の氣風を涵養し維新の時代に至り許多の勤王家の輩出たる潛勢力となりし如き豈に土佐國の精英を發揮せる者にあらずや嗚呼土佐國豈に何ぞ人

物ならんや唯從來之を著す文章なきを恨むのみ蓋し前輩の内岡本信古稻毛實伊尾木實猪諸老の土佐奇人傳森正名の土佐人物志等ありと雖も概ね太平遊戲の餘み出で啻に奇癖にして笑ふ可き喜ふ可き怪奇人物の傳奇を網羅するに過ぎざるを偶々其中多少着實讀む可きの快傳かきあちらと雖も要するに皆醇乎として醇なる者にあらず余之を惜むの餘浪りみ菲才を顧みざる舊書を探り故老を問ひ或は青山に斷碑を摩し或は寒村に遺民を訪ひ凡そ土佐國に在りて一科一藝すべて世用を益し名教を補ある者を修めて鳴盛を得たる人物の傳數百を得たり今其中淨書の成る者若干を抄して之を上木に付し聊

か世の土佐人物の傳奇を探くる者を資くといふ然も一國の人物傳奇は一人の傳奇を草すると異ふ勢ひ仔細の其詳細を述ふる能く其各箇の文章粗大簡略を過ぐる者あるは已むを得ざるなり若し其探聞の粗漏より事實の誤謬を來す者あらば幸よ識者の提撕を待て其訂正を施さんと欲す今出版の臨み聊か所感を記して自序とあすといふ

明治二十九年十二月

寺石 正路識す

土佐人物傳目次

經學文章

○南村梅軒	一頁
○吉良宣經	九頁
○吉良宣義	一一頁
○釋信西	一三頁
○釋忍性	一四頁
○釋天室	一五頁
○谷時中	一五頁
○小倉三省	一九頁
○山崎闇齋	二三頁
○長澤潜軒	三〇頁
○町定靜	三二頁

○曾我晩亭 三三頁
 ○谷一齋 三四頁
 ○岡新之 三八頁
 ○大高坂芝山 三九頁
 ○黒岩慈庵 四二頁
 ○安藝恒實 四三頁
 ○濱田雪明 四五頁
 ○緒方宗哲 四五頁
 ○谷秦山 四七頁
 ○三宅尙齋 五四頁
 ○宮田定則 五五頁
 ○宮地靜軒 五八頁
 ○桂井素庵 五九頁

○大谷養正 六二頁
 ○美代敦本 六三頁
 ○谷垣守 六五頁
 ○齋藤實純 六八頁
 ○陶山南濤 六九頁
 ○中村嘉種 七〇頁
 ○戸部愿山 七一頁
 ○宮地爲齋 七二頁
 ○丁野南洋 七三頁
 ○植田桂南 七四頁
 ○鵬田東川 七五頁
 ○谷眞潮 七六頁
 ○箕浦行直 八一頁

- 箕浦直彝 八四頁
- 松田思齊 八六頁
- 宮地仲枝 八八頁
- 山本日下 八九頁
- 山本玉岡 九〇頁
- 山本霞嶽 九一頁
- 山本澹齋 九二頁
- 黒岩龍谿 九三頁
- 入交幽山 九四頁
- 廣井遊冥 九五頁
- 竹村東野 九六頁

上卷目次終

土陽叢書
第六編

土佐人物傳

上 卷

◎經學文章

杜山 寺石正路著

○南村梅軒

南村梅軒一に離明翁と号す其貫籍を詳にせず或と曰く周防の人にして素と大内氏の臣なりと天文中土佐に來り吾川郡弘岡の城主吉良伊豫守宣經の客たり時海内板蕩天下麻の如く亂れ干戈糜爛し文運否塞す梅軒獨り其間お出で孝經四書を読み忠信孝悌の道を講じて名教を扶持す蓋し當時大内氏は西國の大侯にして應仁亂後京師の公卿多く之に適皈し禮樂絃誦獨り其地に盛なれば梅軒の如きも亦其地お在て學統を受りしものならんと云ふ人と爲り冲澹恬靜榮利を羨まらず清貧に安して心を聖學に潜む其初て宣經を見るや世子宣直及び老臣吉良宣義侍座す宣經

儒者の學を問ふ梅軒答へて曰く夫れ儒とは學者の惣稱なり而して小人儒君子儒の分あり或は達儒腐儒眞儒曲儒等の目あり記誦の末を務めて義理の源に昏く徒に名を賣り祿を買ひ利習に牽され私欲是れ計る是れ即小人儒なり文章字句の迹を拘泥して一般の事務を辨せず當世の用を適せざる者は腐儒と爲す其心頑曲偏頗にして専ら古道を引き今政を謗り已を責めず人を尤め筆舌を巧みして是非善惡を顛倒する者は曲儒となす君子儒は則ち然らず仁義の道を講習し心を得て身を行ひ綱常彝倫の大より起居飲食の細に至り幽にして鬼神の道顯にして天地の理に至るまで周ねく通じて遺す事なく其心活動左右自在事に方り物に接はり機を應じ變に従ひ滯する所なく言行一致心貌和同して君父の事ふるも此道を以てし臣妾を使ふも此道を以てし推て治國平天下に至り皆此道に非ざるなし概して之を道義の學と謂ふ宣經曰く願はくは道義

の學を聞かん梅軒曰く四書を具ばりて欠くると無む君就て習ふ可し臣又何をか説かんやと」
 宣經又問ふて曰く毎日身お切なる工夫如何梅軒曰身お反り獨を慎み人を尤むるお薄く怨お遠ざかるにあり宣經曰く己の教を聞くを得たり敢て問ふ日々事を謀るに當り其眞偽是非の分ち難きお逢ふ時は暫く措て緩く思ふ是れ可あらん歟梅軒曰事に緩急あり概して言ふ可からず然も急迫多くは失錯を招く世間何事か忙裏より錯り了らざるとと張參政の教おあらずや臣聞く昔し漢の劉玄徳は智ありて遅く我が源豫州は智ありて速しと然るお遅き者とは微賤より起りて蜀を保ち一時の豪傑を收用して鼎足の業を創め速き者自ら高ふり傲慢無禮當時の人望を失ひ企胞不和にして蓋世の功を空ふし疏離困厄し身を亡ぶすに至る蓋し遅き者ば其智を用ゆる事周ねく謀慮深遠事を熟鍊して根柢を堅くす故に能

く其終りを保つ迷き者は機ふ乘て敵を撃ち變ふ從ふて勝を制し失を取
り不意に出づる事積水を決する如し是を以て豪氣人を呑み千里の外を
慮らず故に禍患庸墻の内お起る想ふ此の如き人と必ず事をあす事周
密ならず智を用ゆる事疎畧おして獨斷を好みて人の謀を取る無し是れ
一時の意を快くするお似たりと雖も遂に其終りを善くする事莫し今日
の源豫州宣經の事宣經は希義の裔は知かず焉んか居る宣經笑ふて曰く
余撲擲たる短才愚にして且つ拙し何ぞ古豪傑の万一を望まん哉但獨斷
を好まずして人の謀を用ゆる事庶幾ふ所あり梅軒曰く善哉君の言や古
今人君の大道是に過ぐる事なし舜問ふ事を好み禹善言を拜し共に文明
の治を極む唐の太宗亦諫に従ふ事流るゝが如く遂に貞觀の太平を成せ
り凡そ我身の非は自ら見る事難し故に人に匡すお若かず天子諸侯争臣
あれば國天下を失はず士録友あれば令名を離れず父諍子あれば身不義

に陥らず古の明君は一命を出さんと欲すれば則ち先づ三老五叟に問ひ
而後布き行ふ智徳ある人と疎遠なるも之を親近し其言を尽さしめ以て
我心の非を正す然るに今の諸侯多くは曰人の策に頼れば我之策なきに
似たり人の能を用ゆれば我は能なきに似たり名士を他邦より招けば其
家に人無きに似たりと惡是れ何の言ぞや果して此言の如くなれば舜禹
以下の明主皆是れ智能法律無く下愚庸劣の君とあすか思之ざるの甚し
きと謂ふ可し孝宣の漢家自ら法度あり王霸を交へ用ゆ何ぞ古法を用ひ
んやと言しすら識者尙は之を非なりとす況や孝宣の才に及ばず漢家法
令の百分一に至らずして爾り云々は區々たる局量にして井蛙の見憫笑
に堪へたり宣義曰く恭く訓誨を賜ふ感激の至りに勝へず抑僕嘗て世人
の言を聞くに學問ある者瀟て人心の助とするに足らず亦行事の使と爲
らず且の書を讀み字を解するが如きは緇徒の事業にして武夫の道に非

すと僕亦窃かに之を是ありと謂へり今にして後始めて其惑を解くを得たり大幸何事う之に過ぎん

梅軒曰く然り然りと雖も當世は眞儒なく只小人儒のみなれば世人學問の眞に益ありて尙ふ可き事を知らず則爾か云ふも亦理あきに非ざるなり吳の孫權呂蒙に謂て曰書を讀みて博士とあらんと欲する勿れ唯其大義に涉獵し知識を廣め以て事變を計らん事を要す宋の太宗曰く卷を開けば益あり心氣の勞を覺えずと古明主の勤むる所大概此の如し何を細徒の業にして武夫の道に非すとせんや且つ讀書原と却て細徒の事に非ず夫れ禪家の大旨は直に心を指示す文字を立るを藉らずと謂へり入定兀座すれば塵を拂ひ相を離れ念を絶ち情を忘れ心虛に氣醒に萬事了々風月洒々たり塵縁尙は頓に起る有るも手に隨ふて即滅す大明依然昭曜虧ぐる事無し予固陋にして眞儒の域お及する能はずと雖も叩りに自

ら謂へらく三綱五常の道は眞に天地を維新するに足る諸子百家是を更め變ること能はず但明に此心を曉るは禪法に若くはなし心は身の主にして万事の根なり心定靜なるに非んば何を以てか事を辨せん或は千軍万馬の馳驟する間彈丸矢石の雨注する中に立ちて此心鎮定せずんば如何ぞ怖れ且惑はざらんや

宣經曰く兵書は何れか最善き梅軒曰七書に過ぐる無し中に就き孫吳を第一とす宣經曰勝負の術何の所にか由る梅軒曰奇正虚實に外ならず凡そ攻守の勢剛柔の質動靜の機分合の位は虚實を知り奇正を定むるに在り宣經曰如何ある是を奇正と謂ふ梅軒曰戰を奇兵とし守を正兵とす八陣は四正四奇にして敵に勝つ所の妙術は外に在り六花は三正三奇にして敵を制する所の神兵は他に在り動靜迭に變ずる事足の歩を運ぶが如く分合數替りて浮雲の風に從ふが如し奇正は定所無く又定形無し唐の

太宗曰實を避け虚を撃つの説誰か之を知らざらん然りと雖も戰に臨み敵に對して眞に能く之を知る者無しと敵の虚實は唯我兵の虚實を以て之を知るに若かず是れ蓋し不傳の秘なり宣經容を改め謝して曰く幸に明論を聞くを得て余が茅塞を開く願くは今に繼で日々に教を受けんと是より禮遇太だ優なり梅軒嘗て宣義に語て曰學に進む漸あり速成を欲する勿れ但當に循々已まざる可し已まざれば遂に得る事あり己に得る事有れば自ら己む能えず故に學びて三年間斷あくんば則心得る所有らむと其學者を教ゆる必存心謹言篤行の三事を以てす曰く是れ修爲の基なり道廣邈と雖も其實は己に備はる其己が爲めにする事を會得せば則貧富の爲め移されず是れ學問の效驗なりと又三十六策問を作る今缺亡して傳はらず

識者曰く梅軒が論眞に痛快明確なりと謂つ可し但存心の工夫に至り儒

の敬居を説かずして流れて禪家に入る是れ甚惜む可しと天文二十年宣經卒して其終る所を知らず業を受くる者吉良氏一族の外釋の信西、忍性、天室等皆其衣鉢を傳へ一家の門戸を開き南學の端緒を開く大高坂芝山の贊に曰く

南村有梅。幽芳絶妍。孤立萬花之頭上。獨步天下之春先。

因に云ふ梅軒の傳へし學統を南學と名づくるは是より先き西國大内氏の文學を西學と名づけしに對してなり

吉良宣經

吉良宣經伊豫守と稱す本姓は源氏頼朝弟土佐冠者希義の裔なり世々吾川郡弘岡吉良峯の城に居る因て吉良を以て氏とす人とあり溫和聰敏義に屈し諫に従ふ文にして委靡なからず質にして鄙野ならず親に事ふる孝に下を撫する慈なり是を以て郡郷整理し諸人心服す南村梅軒を招て

賓師とし儒學を講せしむ當時戰國の余習人心悍武なり宣經獨り鞍馬の間ふ所り經書を讀み禮樂を崇ぶ士風是より醇化大に敦厚を歸すと云ふ

嘗て其子を戒て曰く明主四得あり已を得て後人を取るを得へ時を得て後敵を勝つを得へ智遠く敵を制するに至る故に克く永く其邦家を保つ暗主四失あり時を失ふて後敵に勝つを失ふ人を失ふて後已を失ふ惜近く已を忘るゝに至る故に戮を後昆に貽す明暗の分辨せざる可からずと又軍律を撰し法令を議定す此時天下大に亂れ群雄蜂起互に衝を争ふ宣經竊かに四國を撰定して雄圖を展ふるの志あり天文十八年冬雪夜老臣谷將監が家につき老臣を集め其策を議す二十年秋九月朔日長曾我部元國を伐つ軍中疾を獲てりへる其十二日卒す年三十八梅軒の挽詩に曰く
昊天不憫奪三元勳。恰若妖星阨蜀軍。滿目潛然明未滅。丹心願染

素絲裙。

吉良宣義

吉良宣義右近と稱す伊與守宣經の從弟にして家中の老臣たり木強方正道を崇び學を好み南村梅軒に従ふて經義を講究し君臣相儆誠して良朋の切蹠するが如し已おして宣經卒す子宣直嗣ぐ宣直禪法を嗜み意を政に留めず薙髮持戒せんと欲するに至る宣義切に之を諫止す以爲らく嗣君の不肖恐く之其社稷を覆さんと日夜憂慮直諫して休まず宣直稍之を疎んず左右意を逆へ讒して曰く先君病革なる時彼れ長を廢し幼を立ん事を勸む其意自ら擅にせんとす國の爲め計るにわらず宣直乃ち小池孫六夜須三七郎二人を遣はし宣義の五罪を條擧し責めて曰く尙ほ分疏ありや否宣義曰く謹で命を承く但條中の四事は乃ち造言にして虚偽なり世子を建つる一事お至りては眞なり臣當時先君お勸むる所以の者豈他

あらんや願ふも君常々閑居座禪を好む封域の政恐くは其煩に耐へざらん事を故に位を千徳君に譲りて各其好む所に適せしめば亦可ならずや是れ則ち臣が君家に忠なる所以なり若し是により譴を受け宗族を夷滅せらるゝも敢て辭せざる所なり二使曰く四事は微罪なり建儲は大事なり君宜しく之を隠諱す可し宣義曰く是れ君を欺くなま刀鋸鼎鑊何ぞ懼るゝに足らんや信を捨て義に違ひ詐を以て君に仕ふるは士の愧る所あり公等我が爲に實を以て君に白せ二使復命す宣直忿りて之を其家に錮する事半年餘悒鬱して病を發す醫藥を却け飲食を斷ち絶命の詩を賦して曰く

丹心一片斷無私。幾度朗吟正氣詩。沒後雙瞳先欲稿。勿見勾踐破吳時。

乃ち宣經の畫像を壁間に掲げ香を焼き衣を更め三拜して死す實に永祿

五〇年〇の〇春〇あり〇未〇だ〇幾〇く〇な〇ら〇ず〇し〇て〇宣〇直〇本〇山〇梅〇慶〇が〇爲〇め〇に〇滅〇ぼ〇さ〇る〇宣〇義〇の〇子〇某〇求馬と稱す鹿兒城に在り城陥るに及び力戰して之に死す女あり大高坂權頭に嫁す亦貞烈の名ありと云ふ

○釋信西

釋信西一に如淵子と号す吉良宣義の甥にして吉良親實の異父兄なり元と宗安寺の僧侶なり天資聰明初京師の妙心寺或云東福寺に學び後南村梅軒が經を講ずるを聞き遂に歸正して儒を學び親實の家に寓居す釋忍性と交誼甚だ厚く共に孝經論孟を講じて以て士風を淬勵す常に靜座を好み内省の工夫を力む學生に訓へて曰く靜に本心の虛明夜氣の湛清なるを觀て以て應事接物の抵を植てよと又曰く古人云ふ言行は身を立つるの基なり三思して言ひ九慮して行ふは其忠信篤敬ならん事を欲してなりと是れ梅軒が所謂修爲の三事なり後ち長曾我部元親の招きに應し忍性

と。共。に。岡。豊。城。内。に。赴。き。經。を。講。ず。天。正。十。六。年。吉。良。親。實。讒。死。す。る。に。及。び。信。西。又。座。し。て。戮。に。就。く。其。絶。命。の。詞。に。曰。く。

五。蓋。聚。散。處。の。人。間。作。古。今。不。生。還。何。滅。洞。然。常。法。心。

信。西。素。と。前。吉。良。氏。の。家。宣。經。の。胤。に。し。て。後。吉。良。氏。の。親。實。に。於。て。亦。姻。あり。此。に。由。

り。舊。記。を。考。へ。旁。ら。親。實。に。問。ひ。元。親。四。國。の。戰。を。畧。記。し。合。せ。叙。し。て。吉。良。物。語。の。草。を。創。む。と。云。ふ。俗。に。傳。ふ。親。實。讒。死。の。後。其。舊。臣。七。人。相。連。な。り。て。死。す。る。も。の。遊。魂。漂。泊。し。て。崇。災。を。爲。す。之。を。七。人。み。さ。さ。と。云。ふ。信。西。も。亦。其。一。人。な。り。と。

○釋忍性

釋。忍。性。初。忍。藏。主。と。稱。す。長。岡。郡。吸。江。寺。に。居。る。性。明。敏。儒。を。南。村。梅。軒。に。及。び。能。く。經。書。を。講。す。長。曾。我。部。元。親。の。招。に。應。し。其。岡。豊。城。に。至。り。每。月。六。回。講。筵。を。開。き。經。を。教。授。す。長。曾。我。部。氏。の。一。族。に。弟。皆。來。り。聽。く。文。學。一。時。城。中。に。盛。

なり。釋。信。西。と。交。り。善。し。信。西。吉。良。親。實。の。事。に。坐。し。て。誅。せ。ら。る。に。及。び。忍。性。も。亦。稍。疎。斥。せ。ら。れ。て。死。す。

○釋天室

釋。天。室。は。吾。川。郡。長。濱。村。雪。蹊。寺。の。僧。な。り。嘗。て。南。村。梅。軒。が。經。を。講。ず。る。を。聞。き。弟。子。の。禮。を。執。り。其。門。に。遊。ぶ。信。西。忍。性。二。人。己。に。死。し。學。統。殆。と。絶。ん。と。す。是。時。に。當。て。天。室。幸。に。獨。り。存。し。谷。時。中。を。得。て。之。を。傳。へ。南。學。遂。に。大。に。興。こ。る。世。に。信。西。忍。性。天。室。の。三。人。を。三。叟。と。稱。す。

○谷時中

谷。時。中。字。と。素。有。鈍。齊。と。号。す。時。中。は。其。名。な。り。祖。先。奥。州。の。佐。藤。氏。に。出。づ。中。葉。の。祖。修。理。な。る。者。安。藝。郡。甲。浦。に。住。す。其。後。累。傳。し。て。宗。慶。に。至。る。親。鸞。派。の。僧。に。し。て。即。ち。時。中。の。父。あり。時。中。慶。長。四。年。を。以。て。甲。浦。に。生。れ。後。吾。川。郡。瀬。戸。村。眞。常。寺。に。移。る。幼。に。し。て。穎。悟。神。識。儔。を。超。ゆ。隣。邑。長。濱。村。雪。蹊。寺。の。僧。天。

室が弟子となり慈沖と稱す。從て四書四易古文唐詩の類を讀む。後更。於て時中と云ふ。

嘗て天室が大學の財を生ずるに道ありの章を講ずるを聞く。講畢りて天室語て曰く。資財は人を殺し身を喪ふの本なり。其有るの難きは寧ろ無きの易きに若かずと。時中曰く。財本と人を殺すに心なし。人々貪奪し自ら敗亡を取る譬へば。燈火の蛾を殺さざるも蛾自ら燈火に死す如しと。天室大に之を奇とす。

性豪邁。諂諛する所なし。權貴に遇ふと雖も長揖するのみ。未だ嘗て拜せず。直に之を名いふ肯て敬稱を用ひず。一士人其不遜を怒り刀を抜き脅して曰く。賣僧何の徳ありて常に士大夫の上に在りて飽煖を占るを得る若し。説なくんば身首其處を異にせんと。時中自若として曰く。我死生を見る事一の如し。何ぞ以て懼るゝに足らんや。唯汝が欲する所に任すと。神色自若

たり。士人異として害を加へず。反て謝して去る。山内二代國守忠義公長濱に遊ぶ。毎に眞常寺の境内を通過す。蓋し官道より捷きが爲なり。一日日暮れ門已に閉づ。從臣呼で曰く。疾く門を開け。時中答て曰く。是れ我が境内なり。公等往還の路にあらす。官道彼に在り。何ぞ從ふて行りざると。遂に開かず。後其佛に入るの非を悟り。蓄髮して俗に還る。是より鈍齊の号あり。程朱の學を海南に教授す。當時之を南學と稱し。從遊甚衆し。

時に天下大亂の後。文運未だ閉々。加之土佐は南海の濱に僻在し。書を獲る最難し。嘗て上洛の時。大學を見。一本を寫して國にかへり。平素佛壇に秘藏し。經文に代へて。時々之を誦讀せりと言ふ。已にして平安浪華長崎に求め。稍々若干を得たり。性博覽強識書として讀まざる無く。讀むとして。請せざるなし。家素と富饒。鹽田若干を有す。嘗て曰く。富貴志を失ふ。田産は子孫に貽す所にあらず。若かず。聖賢の書を讀み。道義を講明して。以て後昆に

傳へんに、は、と、仍、ち、慶、安、元、年、城、下、の、豪、商、播、磨、屋、宗、徳、に、瀬、戸、村、に、在、る、所、の、
 鹽、田、三、百、石、を、賣、て、其、價、十、六、貫、目、を、得、た、り、之、を、以、て、男、一、齋、に、與、へ、京、師、に、
 遊、學、せ、し、む、父、老、傳、へ、云、ふ、當、時、國、中、錢、貨、極、て、乏、し、く、宗、徳、十、六、貫、目、の、錢、を、
 街、上、に、堆、積、す、る、や、市、人、群、集、見、物、市、の、如、し、と、

晩、年、程、朱、を、尊、信、す、る、益、堅、く、初、年、の、佛、老、に、浸、淫、し、百、家、に、泛、濫、す、る、に、懲、り、
 慨、然、道、を、求、む、る、に、切、な、り、而、し、て、其、師、弟、の、間、教、育、頗、嚴、な、り、野、中、兼、山、小、倉、
 三、省、山、崎、關、齊、皆、其、門、よ、り、出、て、後、各、其、所、見、を、以、て、一、世、を、風、靡、す、就、中、關、齊、
 が、剛、毅、威、重、師、道、の、甚、嚴、な、る、蓋、し、時、中、の、遺、習、に、本、く、あ、り、藩、主、數、徴、せ、と、も、
 辭、し、て、起、た、ず、慶、安、二、年、十、二、月、晦、日、を、以、て、没、す、年、五、十、二、瀬、戸、山、中、に、葬、る、
 里、人、尊、崇、祠、を、見、殘、坂、に、建、て、清、川、神、社、と、稱、す、須、賀、氏、を、娶、り、て、一、男、を、生、む、
 即、ち、一、齋、な、り、又、父、の、衣、鉢、を、繼、て、大、儒、と、あ、る、著、は、す、所、詩、文、遺、稿、あ、り、

○小倉三省

小倉三省通稱は彌右衛門名と政實又名は克通三省は其号あり父と少助
 政平と曰ふ慶長九年四月十八日近江山山上お生る

人となり寛量にして大度あり幼より若冠に至るまで深く自ら韜晦す故
 を以て人或之を痴なりと謂ふ寛永十九年二代國主忠義公特お拔擢し
 て大扈從となし祿二百石を給ふ慶安元年命じて仕置役となし父政平と
 其職を同ふす 政平元和三年よ承應元年政平致仕するに及び三省襲て父
 の祿を合せ八百石を食む是より先き政平老を以て職を免せん事を請ふ
 忠義公之を惜んで許されず再三請ふに及び公曰く汝職を免す後任は誰
 お托すべきやと政平曰く他人の適否争でか之を知らん唯臣が男彌右衛
 門其器なりと公曰く彌右衛門如何なる器ぞ曰く天氣の事など申し上げ
 ざる者なりと公善とし之を許す
 三省政を爲すや垣懷虚襟喜で衆の善を取る人も亦爲めに謀義を陳する

を悦ぶ故に庶事皆其成るに就く平生自奉太だ薄く、麤衣惡食人、或は其吝を疑ふ然も窮を賑し貧を恤むに至りては有る所を盡して惜む色なし常、小人の語て曰く我聲色臭味の欲、お於て生れ得て自ら淺し故に之を以て心を役する事、少なしと嘗て國君に稟して大罪の中、お於て情の輕き者を擇び墨劓刑の刑、お換へ死を救ふと若干人又廳壁、お書して曰く一命之士、苟存、心於愛、物則於人必有、所濟と一日獄を斷す罪死に至る者あり跡、箸災に出る如し罪の疑はしきを以て特、お之を輕くし州外に放逐す其單衣を服するを見、滄然として曰く時方、お寒し恐くと道、お凍餓せんと乃ち之に緇袍及び酒食を興へて去らしむ其人感泣して曰く放逐原と自得の罪なり將た誰をか怨みん只此慈恩何の日か之を奉報せん哉と拜謝して去る其慈仁率ね此類あり

父政平仕置役となり奉行野中兼山を助、國中の水利土功を興じ民益を

進むる極て多し己、おし事半はにして老す三省是に至り其志を繼ぎ左提右挈遺業を成就し或は韭生山を鑿りて水を導き鏡野を墾して水田となす功利の擧かる者枚擧す可からず

幼、おして僧天室の講席に連なり中年谷一齋の門、お入り其終り實踐体察を以て性命の源を自得し程朱を確信し儒術を尊崇し官事の暇には講筵を開き生徒を教授し小學四書近思錄五經通書易學啓蒙三傳三史通鑑綱目大學衍義十七史等を講し旁々程朱張邵の書に涉獵す祖先の祭式は儒禮を尙び主として朱文公家禮の儀を用ゆ常に弟子を教へて曰く學は夫れ知る可き也行ふ可き也涵養は須らく主一を用ゆ可し窮理は讀書を以て要とす讀書は氣を平ら、おするにあり而して商量して迂濶なるなかれ奇異なるなかれ看來り看去る唯自然の義に歸着するのみ小學近思錄は便ち四書六經の階梯なり此二書を見得て己、お切ならば學を爲す其端緒

を得たる者なり又曰く伊川以爲らく書を説く必ず古意に非ず轉た人をして薄ならずしむと學者は故に須らく潛心焦慮優遊涵泳すべし今日書を説くも唯是れ薄を教し得る何の功かあると乃ち論語の講案を手寫して鐫板し生徒に頒つ是を以て業を請ふもの必ず師の講説を默聽せず自ら講じて正を乞ふ今南國の古板物に夙夜箴感與詩等あるは實に其筆蹟なりと云ふ

承應三年春父の喪を執り哀毀禮に超へ羸毀して疾起る秋七月十五日に至り遂に歿せ年五十一越て一旬長岡郡大島山先塋の次に葬る男政義家を繼ぐ名は助之進實は弟宗閑の子あり

是より先き三省兼山と同く谷時中の門に出で學術指趣頗る相匹似す然も兼山天資英特剛邁自ら用ひ敢て顧慮する所無し三省は之に反し温厚和醇物と忤ふなく謙虛退讓急遽を好まず故を以て均しく其職に在り

て官蹟功烈遠く及ばざる如し而して人物の高き殆ど其上に出づ嘗て兼山を戒めて曰く古の功臣終りを令くし福祿子孫に及ぶ者は皆徳量寛大仁を垂れ惠を布く若し夫の嚴刑峻法は一時効を爲すと雖も其積怨買禍亦未だ自ら全くする者あらずと兼山以て善しとす而して終に用ゆる能とざるなり三省歿する後復た争友の罅漏を補直する無く果して其終を善くせざるに至る

林羅山嘗て其碑碣の文を讀み嘆して曰く四裔之濱匪王氣之被而有此等人物有此文章一豪傑俊人何代乏焉何地無焉嵩岳之神奎星之靈鍾降於海之南乎と羅山と一世の名士而して其推獎此の如し以て三省を定むるに足る可し

○山崎闇齋

山崎闇齋名は嘉初の名は柯字は敬義闇齋は其号なり晩にして又垂加と

号す俗稱は嘉右衛門初め長吉又清兵衛と稱す其先播州の人曾祖淨榮と
 曰ふ三木に居る祖又四郎淨貞木下肥後守家貞に仕ふ父長吉全家定並子
 宮内少輔利房に仕ふ已にして去て京師に浪居し名を淨回と改め鍼醫を
 業とす佐久間氏を娶て二男二女を生む季と即ち開齋なり
 開齋元和四年十二月九日を以て生る野中兼山より少きこと三才幼にし
 て穎悟敏慧才機煥發已に等儕を凌ぐ六七才の時已に無賴惡戯をなし毎
 に堀河橋に出で竿を以て行人の脛を打し其水中に墜つるを見て樂とす
 父母之を思ひ妙心寺に遣はし僧となす八才にし法華經を暗誦す一夜庵
 中經を讀み大笑す師僧驚き問ふ答へて曰く釋迦の妄誕を笑ふなりと
 成童の頃土佐ふ來り長岡郡吸江寺に居り湘南和尚の徒弟とあり絶藏主
 と号す當時吸江寺に三藏主あり絶、文、千代と云ふ就中絶藏主秀才衆に
 優り學業絶倫嶄然頭角を抜く或時人あり其寺に遊び主の來るを見て草

を。取。り。頭。上。に。置。く。主。其。時。木。履。を。穿。ち。居。し。に。幾。く。も。な。く。茶。を。捧。げ。來。る。
 蓋。し。茶。は。上。は。草。中。は。人。下。は。木。の。謎。字。な。れ。ば。ち。り。又。一。日。海。上。帆。船。の。入。來。
 る。あり。絶。藏。主。船。頭。に。問。ふ。て。曰。く。何。反。帆。の。船。なり。や。と。船。頭。之。を。勞。と。し。答。
 へ。て。曰。く。小。坊。主。の。頭。を。八。反。船。ち。り。と。主。憤。然。と。して。怒。て。曰。く。余。は。實。に。船。
 頭。が。糞。九。反。船。なり。と。思。ひ。し。と。是。れ。一。時。の。戲。謔。と。雖。も。又。機。才。の。人。に。勝。れ。
 た。る。一。班。を。知。る。に。足。る。べ。し。小。倉。政。平。野。中。兼。山。等。聞。ひ。て。之。を。奇。と。し。遂。に
 勸。め。て。儒。に。歸。せ。し。む。る。志。あり。

兼山等是より屢絶藏主と會し朱子語類或は文集等を示し是を提喻す官
 暇に之講學の會を開き招ひて席お列せしむ一日谷時中來り中庸を講す
 兼山豫先厨人に命じて魚肉を備へしめ曰く今日の會絶藏主必ず肉を喫
 せんと已おして講談一了す絶藏主果して感激珠子を擲て儒に歸す時に
 年二十五才なり尋て正保元年絶藏主又父の命を以て還俗本氏お復し關

異。一。卷。を。著。は。し。其。決。意。を。示。す。時。年。三。十。是。よ。り。初。て。開。齋。と。号。す。
 開。齋。已。に。佛。を。去。て。儒。に。皈。す。而。も。之。を。以。て。藩。府。に。申。告。せ。ず。藩。主。其。國。法。を。
 蔑。す。る。を。怒。り。之。を。逐。わ。ん。と。欲。す。蓋。し。吸。江。寺。は。素。と。京。都。大。通。院。の。末。寺。と。
 雖。も。其。中。興。祖。師。湘。南。和。尙。は。故。あり。嘗。て。藩。祖。山。内。一。豊。公。の。養。子。たり。し。り。
 ば。恰。も。門。跡。の。朝。家。に。於。ける。如。く。特。待。の。寺。院。と。な。り。從。ふ。て。其。住。僧。に。し。て。
 擅。ま。に。儒。に。歸。す。の。み。な。ら。ず。書。を。作。り。て。佛。法。を。毀。る。お。至。り。て。は。勢。ひ。藩。
 主。の。譴。責。を。免。れ。ざ。る。は。已。む。を。得。ざ。る。な。り。是。お。於。て。野。中。兼。山。等。深。く。之。を。
 惜。み。藩。主。に。向。ふ。て。諫。む。る。所。あり。し。も。遂。に。聽。り。れ。ず。開。齋。則。ち。土。佐。を。逐。は。
 れ。漂。泊。京。師。に。返。る。兼。山。其。窮。を。憐。み。爲。め。に。家。を。吉。町。出。水。上。町。に。買。ひ。之。を。
 置。き。且。つ。年。月。に。米。薪。を。餽。給。し。又。書。生。數。人。を。遣。は。し。て。炊。爨。の。勞。を。資。け。並。
 に。就。て。業。を。習。は。し。む。
 是。よ。り。先。き。開。齋。土。佐。に。在。る。や。寛。永。十。六。年。僧。空。海。の。三。教。指。歸。に。習。ふ。て。三。

教。一。致。論。を。作。り。全。十。八。年。薊。野。天。王。棟。札。銘。全。金。燈。籠。銘。五。臺。山。竹。林。寺。鐘。
 樓。銘。を。作。る。皆。署。し。て。絶。藏。主。と。曰。ふ。京。に。歸。り。て。後。慶。安。四。年。兼。山。の。爲。め。
 母。堂。秋。田。氏。墓。表。を。作。り。明。年。更。に。歸。全。山。記。を。作。り。承。應。二。年。又。片。岡。半。齋。碑。
 銘。を。作。る。其。文。章。斷。碑。今。猶。は。現。存。す。
 開。齋。南。學。の。統。を。受。け。程。朱。の。學。を。主。張。し。一。時。天。下。を。風。靡。す。門。人。前。后。六。千。
 余。人。而。も。性。急。に。人。を。罵。り。師。道。嚴。格。人。勝。ゆ。る。能。さ。ず。蓋。し。先。師。谷。時。中。の。遺。
 風。を。受。け。稍。其。極。に。過。ぐる。もの。な。り。高。第。佐。藤。直。方。嘗。て。曰。く。吾。曹。日。に。翁。の。
 怒。言。を。喫。し。精。力。己。に。盡。く。若。し。之。を。久。ふ。せ。ば。勢。死。に。至。る。可。し。と。淺。見。安。正。
 曰。く。吾。も。亦。之。を。思。ふ。然。も。方。今。翁。を。除。ひ。て。海。内。良。師。な。き。を。如。何。せ。ん。と。二。
 人。後。遂。に。之。に。背。き。門。藉。を。削。ら。る。後。藤。松。軒。又。嘗。て。講。座。に。列。す。開。齋。講。し。了。
 り。顧。み。て。曰。く。坊。主。亦。會。する。や。否。と。當。時。松。軒。落。髮。し。て。僧。頭。と。な。り。し。を。以。
 て。な。り。松。軒。是。よ。り。忿。恨。し。て。終。身。又。開。齋。の。書。を。讀。ま。ず。我。海。南。の。學。徒。お。し。

て業を受くる黒岩慈庵安藝恒實谷秦山等其外數人あり秦山又嘗て慈庵
 と其門に入るや開齋正お葛衣を服し几お倚り字を寫す門客之を座下お
 引く各姓名を稱して禮拜す開齋首を昂げ視て呼で曰く彼の總角なる者
 と清八小字秦山か聞く汝穎敏と今より努力せよと開齋其門客に對する虛慢
 傲遜率ぬ此の如し

己おして明曆の頃我海南の學徒續々其門を脱するものあり（黒岩
 慈庵も晚お其門を脱せしと云ふも恐くは此時お非ざるう）兼山之を聞
 き悦ばず輒然として交を絶つ開齋數々書を以て陳謝す兼山一語を報せ
 す世兼山が開齋を知る初ありて終なきを惜むなりされど當時兼山が絶
 交の理由を推知するに其頃開齋未だ神道を信せざれば神儒の意見衝突
 より此に至りたるにあらざるは明かなりとす蓋し開齋平生の意氣剛愎
 執拗稍もすれば弟子を虐待し且つ議論頑僻他人の異説を容るゝ度量な

く従ふて平時の彌縫一時に發裂して是に至りたるものなる可し其自ら
 評する言に曰く我生質暴厲にして幼より才を負ひ放恣に人を見て皆己
 の下に在りとす是を以て人の指導を受くるを欲せず故に我を教ゆる者
 なしと即ち其自家の過失は又自ら能く之を知り居れり而して之を改め
 ずして是お及ぶ又自速の禍のみ大高坂芝山南學傳を著はし開齋の傳に
 至りては大に貶辭を寫し口を極めて漫罵す蓋し兼山絶交の事に激する
 なす世人其文章は後藤松軒の徒の作らしむ所となすも芝山素と谷氏の
 門下に出で松軒と交渉おし如何ぞ他の指導を待て此に至らん哉是を以
 て兼山絶交の節に至りては開齋俄々に悔悟陳辯數回又以て其主客曲直
 の孰れに在るを判す可し而して兼山亦遂に強硬開齋の陳辯を容れず交
 道一たび破れて再び調停の機おくして止む惜ひ哉

開齋天和二年九月十六日六十五才にして歿す黒谷山に葬る墓に題して

山崎嘉右衛門敬義之墓と曰ひ祠を下御靈に建て垂加社と曰ふ後故あり
 庚申社に付祀す著書垂加文集等數十卷あり卷秩浩瀚一々枚擧す可から
 ず海南の學徒の中獨り之に始終し其儒學より神道に至るまで一切受業
 して其衣鉢を傳ふ者を谷素山とす

○長澤潜軒

長澤潜軒名は虎字は小貳通稱は文藏潜軒は其号なり父は道壽といひ醫
 を以て名あり母と稻葉内記の女なり元和七年高知城下に生る

幼にして父京師に赴く潜軒獨り國に留まり叔父長澤理成を鞠育せられ
 儒を小倉三齋野中兼山に學び博覽該綜雜書小説に至るまで涉獵せざる
 ちし性遲鈍にして虛中無我あり喜愠色に見はれず苦學して産の有無を
 問はず或は凍餒に逼れども以て意となさず日夜書を讀で義理通せざる
 所あれば憤を發して寢食を忘れ兀座して曉に徹し心得て後己む父の業

を繼た醫を善くし兼て天文曆算に達す

壯にして國を去り久しく江戸に寓し後京師に移る名四方に著はれ信從
 する者多し素と酒を嗜み沈醉して事を廢し或は病を發するに至る一日
 陶潜が詩を誦し感悟し酒戒を作り是より劇飲を止む其江戸に居るや鬚
 鬚剪らず髪々として姿貌怪偉なり一貴人人をして諭さしめて曰く郷の
 我第に來らん事を憶ふ事久し而るに人皆郷の奇貌を怪しむ何ぞ其鬚を
 剃らざると潜軒對て曰く僕苟も俗視を驚かさん事を欲せず然れども貴
 人の眷憐を希ふて鬚を剃るは乃我意に非すと遂に往て見る事を果さず
 中よる播州淺野侯に仕へ暫にして祿を辭し京師小室村に隠れ父の醫業
 を繼て道壽と稱し村民治を乞ふあれば往て療す嘗て一病者あり蓼莪に
 非ざれば療す可からず而るに病者貧にして辨する能はず道壽慨然して
 曰く醫は仁術司命の職あり其救ふ可きを見て救はざるは則ち職に違ふ

て不仁なりと自ら寒を忍び衣を脱ぎ蓆蓐を買て之を療し遂に痊愈を得たり後稻葉侯の客となり丹後宮津城下に在り病で京師にりへり延室四年五月卒す年五十六明人飯室某通稱五右衛門能く其學を繼ぎ會津侯に聘せらる弟太庵又道壽と号し醫を以て鳴る大高坂芝山の贊に曰く
 正保以來弘南學於西洛者闇齋爲之冠唱南學於東武者潛軒爲之胃

○町定靜

町定靜通稱は孫兵衛人となり豪宕卓偉文武の才あり夙とに小倉三省野中兼山の二子に従ふて小學四書近思錄の大義に通ず慶安中江戸内用役と爲る親歿するに及び其喪に居る事敢て國制に違えず二月を越て官に就く家に歸りて素服する事凡二十五日
 兼山黜けらる、後書を高島孫右衛門正信に贈り大に論難する所あり正

信之を目付役中山覺之丞に告ぐ是に於て藩之を以て誅上の罪とをかし其采祿を奪ふ實に寛文四年二月廿四日なり定靜即ち土佐を出で丹波大江山の下に隠れ小原氏と革め億窟子と号し讀書を以て自ら遣る居る事二十余年七十余才にして歿す大高坂芝山曰く余洛に在りて毎に此翁に見へて誨諭を蒙むを忝ふす此人や曲さに南學の由を知れり余三省兼山の景行に向ひ長澤山崎の遺蹤を躡む皆此翁の説によれりと

○會我晚亭

會我晚亭通稱は六兵衛名は直之晚亭は其号なり其系會我時宗に出づ祖先世々安藝郡に住す慶長六年山内公入國以後支族來りて紺屋町に住し紺屋を業とす晚亭其家に生る性稟穎異人に秀で小倉三省の門に遊んで儒學を學ぶ
 寛文六年秋病で歿す遺命して朱子家禮により儒葬をなさしむ時に菩提

所西念寺の僧寂譽之を難して曰く本邦古來葬式の成規上天子より下方民に至るまで一に佛法に職由して其他を知らず今曾我氏余が檀下に在り擅まゝに古例を破て新規に就く國法を蔑する是より大なるはあらざるなしと晩享の遺族是に於て惶惑し表向は其言に隨ふと稱し實は猶は竊かに儒葬を用ひしと云ふ

○谷一齋

谷一齋名は松字宜貞又巳千通稱は三介時中の長子なり一齋又懲室子と号す寛永二年生る性魯訥醇厚夙は業を家庭に受け又小倉三省お師事す若干國を出で京師に遊學す清介廉潔泊然財利の累をなし父時中屢々金を餽り且夕の費に給ふ一齋之を受け竈邊お投し薪と異なるなし野中兼山嘗て京師に在り正宗の名刀を購ひ之を一齋に托して研工に付す偶一窮士あり其兒を冠せんとす一齋に請ふで冠寶とす一齋曰く余何の徳あり

寶となるや但た寶者之當に引出物ある可しと其刀を以て之を贈る後兼山問ふ研成るや否や一齋答て曰く已に一窮兒に贈る公若し之を愛せば更に買ふて還さんと兼山亦之を責めず

萬治元年初て褐を本藩に釋き扈從格に列し右筆となり七人扶持祿米二十四石を賜ふ寛文三年兼山譴を得て官を退き尋で病を以て没するや輩語紛々一時兼山と相交る者皆疎斥せらる一齋亦其十一月九日病に托して致仕し翌四年三月暇を乞ふて再び京師に赴く是より瀬良一齋と改稱す從遊する者甚衆し居る事數年にして江戸に迂る名未だ著はれず會々金龍山淺草寺に新に扁額を掲ぐる者あり其文奇古にして人皆讀む能はず一齋獨り能く之を讀む是に由て聲譽俄かに起り弟子大お進む諸侯爭ひ聘すれども辭して就かず
幾くもなく稻葉侯に遊事し七十人扶持を受け又土井侯に客たり土井侯

は大炊頭利勝と稱す當時幕府の元老おして聲望殊に重く洵ふ天下の事を以てするお至る此時復た谷三助と稱す天和三年改暦の事お由り澁川春海と共お京師に至り其可否を討論す晩年公養を辭し處士とある然も諸侯之を尊信し數々召して事を詢ふ一齋齒德共に高きを以て特に之を優遇し邸門の内に枝つき席上お巾を戴くを許さる嘗て我藩の御留主居役近藤半十郎なる者あり事を以て稻葉侯お謁す一老人の巾を冠り火爐を擁し侯の旁に坐するを見る以爲らく是れ顯貴の人なりと恭しく敬禮をなす言を交ゆれば即ち一齋ありしと云ふ當時一齋處士となるも雖も其外に在り貴人の親昵する處となる此の如し

三代國主忠豐公素と人材を好む野中氏大獄以來國中の學者皆暇を請ふて他藩に遊浪し文學師なきを惜み京師の儒者緒方宗哲を招き三百石を給して賓師となす備前國主池田光政公語て曰く君の舊臣谷三介の如き

天下復た幾人かある宗哲等う如きに至つては斗量箒掃何ぞ道ふに足らんや然るに彼を捨て此を取る乃ち舉措其當を失する無らん乎と侯も亦是に於て稍悟る所あり晩年遂に上齋に諭し特旨を以て江戸の藩邸に往來し並に邸中杖巾を用ゆるを許す元祿八年三月歿す年七十一都下澁谷長谷寺に葬る五男三女を生む多く夭す存する二女子のみ妻弟大高坂芝山墓に銘して曰く

先生爲學 曰省俛焉 其功百倍 自稱已千

唯一心齋 厥操如松 宜貞不諛 厥變若龍

身否里巷 心廣江湖 文星聿墜 芳蘭乍枯

它兆何場 縣曰澁谷 長谷梵宮 先生氏谷

緣合爲銘 建碑神道 億万斯年 令名皓々

一齋南學の正統を受け才學兼到實お儒門の棟梁とす惜哉時勢轉軻にの

際し異材を抱ひて遇ふを得ず泉州の儒高橋遠治爲めふ芝山に書を寄て曰く谷己千子自少至老終始如一學問精好踐履篤實出所義已正窮困操益堅我儕之師表南學之領會也不幸不遇卒落終身真可哀哉と又先哲叢談に物徂徠が護國隨筆を引て曰く有谷一齋先生者嘗上封事而沮格不用予得其策而讀之其中有遷都事故予以此而識其學不爲無所見也方今之世能爲斯業亦難其人矣哉と嗚乎一齋の才と學とを以て其滿腹の伎倆を施さずして已む我獨り一藩の爲先に之を惜むのみならず併せて天下の爲め之を惜むなり』

○岡新之

岡新之通稱之源右衛門其先之長曾我部氏の時一縣主の裔なり長家亡びて後處士となる幼より才穎群兒を異なり谷時中の門に入て經學を切磋す早世其名を掲ぐるに及ばずして逝く

○大高坂芝山

大高坂芝山姓と平名は清介字は季明芝山は其号なり又喬松、一峯、黃裳閣、黃軒、清處士等の別号あり其先大高坂の城主大高坂豊後守經久より出づ父を四郎兵衛宜重と曰ふ宜重二歳にして孤となり岡宜久の養ふ所と爲る因て遂に岡氏を冒し山内家の老臣生駒氏の與力と爲り代官役を命せらる寛文二年罪を得て江の口村に屏居し薙髮して休也と号す芝山幼にして岡九郎三郎と稱す父曰く汝震の初九に當れり故に九の字を以て名に冠すと儒道を谷一齋に學び宏才博識性理を究め詩文を善くす寛文四年一齋家を擧て國を辭し京師に往く是より先き芝山の姉一齋に嫁す是に於て芝山も亦從ひ行く時に年十八薙髮して岡立庵と稱す居る事二年江戸に迂り芝町に居る時明朝の詩卷を見て饒州山小瑞芝を生し芝山と名るあり其地洞庭を望むと云ふ事を得へ地名の相類して且

つ富士山を望むふより遂に其名を用ひて号とす是より又姓名を改め大高坂清介と改稱し儒を以て岩城侯に仕へ尋で内藤左京大夫お仕ふ天和二年韓人來聘するに會す内藤氏之が館伴となる芝山因て韓客と筆談し和漢唱和集を著はす己にして又去りて稻葉侯美濃守に仕へ其肝煎となり尋で貞享二年又去りて松山藩主久松定直公に仕へ銀百枚三十人扶持を受く翌三年知行引直しにより祿四百石十人扶持を賜はる常小江戸奏者番を勤め元祿九年隱居してより又隱居料十人扶持を賜はる

或は曰く芝山内藤氏を去りて後直に松山侯に仕へ次に稻葉侯丹后守

仕ふ晩に小祿の故を以て休致を乞ふ聽されず尋で災にかゝり家財蕩盡す侯重賜あり是お於て止足軒の記を作り敢て復た休を乞はず元祿の初隱居して黃軒と号し詩文を以て樂とすと二侯奉仕の前後稍異れり記して異聞を擴む

芝山人となり才氣超邁氣象豪宕にして標榜自ら高く時儒を視る涕唾も管ならず嘗て適從錄二卷を著とし撞巢窟擊蛇笏等の目を擧げ伊藤仁齋を罵り又南學傳を作り山崎闇齋の傳に至りて大に貶辭を寓し且つ論を付して之を王荊公に比す其門人佐藤直方討論筆記に於て之を辨駁す又明人林珍何情に與へ陳元贊朱舜水を論する書に曰く陳元贊在洛而屢相會、朱舜水在此而適面晤、潛察厥言行學術、欸弗端誠純粹、矣多猥俚之態、乏彥士之姿、詞賦亦似未、英慧、故不欲就而正焉云々其氣岸大率此の如し

是より先き明人林珍何情願長卿の徒來て長崎に在り芝山毎お詩文を致し其正を乞ふ彼各日を極め褒賞し韓柳歐蘇も過ぐるおしと爲すに至る是に於て芝山自ら以て然りとおす江村北海嘆おて曰く林何願の三人孟浪諛言固より論するに足らず而して芝山之を信して自負遂に精細の工

夫を欠く余酷だ芝山が慷慨奇節あるを愛し因て深く三人の爲め誤らるるを惜むと過論にあらざるあり

正徳三年五月六十七才にして歿す江戸澁谷長谷寺一齋の墓畔に葬る著はす所和漢唱和集、適從錄、南學傳、芝山會稿、喬松子、存一稿、餘花編等あり

妻成瀬氏名は臺字は維佐阿波の人成瀬忠重の女なり亦才學を以て聞ゆ兼ねて筆蹟も妙なり嘗て國字を以て書を著とす唐錦と云ふ卷秩浩翰是を以て世に傳ふる少し或は曰く其書忌諱に觸れ官其印行を禁すと

男義明業を繼ぐ子孫世々松山藩に仕ふ南海と号する者も至り書畫を善くするを以て名あり

○黒岩慈庵

黒岩慈庵名は恒字は震翁号は東峯又幽山、晩黒田侯に仕へて後碧山壽

翁の二号あり慈庵は其通稱なり安藝郡安藝浦の人なり祖先安藝國虎の臣黒岩越前の後み出づ父は長右衛門母は須賀氏慈庵は其中子なり幼より學を好み業を野中兼山に受け後京師に赴き谷秦山と共に山崎闇齋の門に遊ぶ万治寛文の頃歸國し藩主の侍讀となる己にして兼山歿して一時學徒皆暇を願ふて國を出づ慈庵も亦去て京師へ赴き尋て江戸に移る聲聞稍顯る時筑前國主黒田侯賢おして學を好み其國に學校を建て貝原益軒を以て教授とし又江戸邸に齋を設け慈庵を聘して教授となし祿三百石を給す學業大に行たる後ち江戸常參となり糧米七十人扶持を受く寶永二年六月二十一日歿す享年七十九江戸芝青松寺に葬る男久八郎家を繼ぎ又黒田侯に仕ふ子孫今に至り猶存す著はす所曆代君臣要畧除患錄慈庵文集等あり

○安藝恒實

安藝恒實通稱は長三郎父は忠左衛門重綱と云ふ幼ふして穎悟秀慧人皆奇童と稱す延寶の頃京師に遊び山崎闇齋の門に入る自ら姓名を革め蘇我元十郎元達と稱す蓋し祖先の蘇我赤兄の出るを以てなり谷秦山又同學の友たり恒實秦山より長ずる事一歳夙夜共に講習討論す嘗て相當に春秋を暗記す秦山嘆して曰く余記臆の力恒實お及ばすと貞享三年五月八日勤學中痘を病で歿す年二十三恒實歿する時衣帶中左の歌あり曰く

明日は又誰無からんも知ぬ世お思ふ友ある日こそ惜しけれ

又其京師遊學の時谷秦山お興る書に曰く

昨日匆匆奉別殘懷深矣僕一二親戚相送前夜至浦戸風濤雷雨非語言所能尽抑少年耽行旅眞分手易前期今家貧親老甘旨無供之念安否無問之憂魂消心折几無人意因綴小詩呈諸左右伏惟賢者哀其志得賜高和幸甚

辭家侍師席海岳十餘程雷雨蓬憲夢鄉關日暮情眼存親鼻面耳響弟兄聲不爲慕明訓何入由帝京

○濱田雪明

濱田雪明通稱は平三郎英才にして經學に耽けり窮苦の中おありて晏如あり五年にして漸く之を免れ家老桐間氏お仕へ若干の俸を受く寛文四年京師に適て山崎闇齋に學ぶ

○緒方宗哲

緒方宗哲名は維文号は木鐘又默堂京師の人にして伊藤仁齋の婿なり幼より仁齋に學び經學お明かに普く程朱張邵の書に通ず寛文三年野中氏大獄の後藩の儒相繼で國を出で文學爲めに一空となる是に於て延寶七年徴されて土佐に來り采地二百石月俸十口を賜はり御相伴格侍讀となる元祿十年加増百五十石都て三百五十石を賜ふ地方二百石藏米百五十

石にして扶持は乃ち除かる平素京師に住し國君歸國の時伏見より陪從し國に來り又明年朝勤お從ひ京師にかへる寶永年代五代國主豊房公命とて土佐國風土記を撰せしむ享保元年歿す年七十余男甚之丞業を襲で官祿故の如し然も不應おして享保七年十月十八日國暇を賜ふ當時在り付までの扶持として二十人口を賜はる後京師に歿す」

宗哲素と野中氏大獄の後藩學興復の目的を以て聘せらるゝも才學文章其聞ゆる所に副わず谷秦山の如き全時に在りて氣類名望遙くに其上に在り傳へ云ふ秦山宗哲と常に經を君前に講す議論往々合はず秦山飯途(當時秦泉寺に住す)愛宕山下角崎を過ぐ歌を咏して曰く

渡しな世と争の車おて廻ぐるや牛の角崎の橋

又秦山の門人宮地靜軒(介行)君命を以て一度ひ宗哲の門お入る其師とするお足らざるを論じて没官配流お處せらる

○谷秦山

谷秦山姓は大神名は重遠通稱は初小三次後丹三郎又櫻井清八と稱す秦山は其号なり世々長岡郡八幡村お居る祖先大和三輪の谷より出づ故お谷を以て氏とす永祿天正中左近なる者あり長宗我部家お仕へ軍功あり其弟を神右衛門と曰ふ亦長宗我部家お仕ふ慶長中歿す其孫神兵衛重光三子を生じ長を彌太郎と曰ふ中を又次郎と曰ひ季は乃ち秦山なり

秦山寛文三年三月十一日己卯卯時を以て生る生る時旭光其額を照す幼おして聰敏強記眼を過て忘れず八幡村の隣村お國分寺あり住僧儒學を好む母死して儒葬を用も寺主怒りて之を逐ふ秦山晚年人に語りて曰く爾時予母の懷おありて之を見る今猶能く之を記せりと年曆を計るお正お二歳なり又隣に一染工あり秦山幼時之に遊び其染張を弄す會其家火災に逢ふ秦山爲先筆を把り染張を暗寫す些を錯らすと云ふ

四才にして家を移して高知に寓す九歳にして眞島崎氏に就き小學四書五經を學び十歳にして常通寺僧守信に従ひ法華經を讀む兩月ならずして之を通誦す三年にして寺を辭し家にかへる延寶七年七十京に上り六月朔日淺見綱齋に面し十月二十一日遂に山崎開齋の門に入る開齋亦其才を奇とす明年四月かへる藩吏之を祿せんとす辭して就らず尋で又上京す天和元年二月又歸國す全二年十月開齋の事を聞き之に會し十二月三たび歸國す天和三年再び高知より家を移して城北秦泉寺村に住す是より初て秦山の号あり全年又上京京を周ぐり西宮に詣で飯る

元祿七年書を澁川春海に寄せ天文曆術及神道を問ふ春海深く其學の精微を感ず明年八月三位安部安福卿爲めに眞享曆法便授免許狀を授け春海も亦自筆の眞享曆書七卷を授く全十年春海又遂に曆道の印可を授く其詞曰く眞享曆十一曜閱其草案一々考証乎推步誠詳哉夫七政四余之

術非數百年來所能及焉可謂珍重也と全十二年春海又中臣祓の印可を授く
全十三年再び居を徙して香美郡山田野に居る安部泰福卿又十一曜の印可を賜ふ全十四年從三位荒木田神主經晃中臣祓の秘傳を授く全十五年春海又三種神器の故實を授く是年邦君旨あり十人扶持を賜ひ其三月遂に命に應じて再城下に移居し有司の招聘により初て神代卷を講ず聽者六十余人十一月冬上京春海を訪ひ又神道印可を受々且つ自筆の瓊予拾遺三卷を授けたる全十六年府居應酬紛繁其講學の累たるを以て請ふて二度山田野にりへる

秦山己に學を以て名を成すと雖も好古の心愈篤し寶永元年官に請ふて天文神道の學頃年頗る其説を聞くも猶ほ未だ其要を得ず因て東遊師を尋ねて學ぶ處あらんとす官之を許す乃ち其二月十二日山田野を發し伊

豫讃岐備前播磨を經へ西宮に詣で難波天王寺に遊び男山八幡宮に賽し
 逐に熱田宮を拜し佐夜中山に登て富士山を望み三月中旬にして江戸藩
 邸に著す即ち澁川春海父子を駿河臺に訪ひ貞享曆瓊予拾遺の奥義を窮
 め天文並神道の口傳を授かる尋て又葵傳を授かる

已して四月三日江戸を發し相州金澤鎌倉に遊び江島に宿し箱根社に詣
 て淺間社を拜し再び熱田に參し伊勢神宮に迂し神主度會經晃の家に宿
 し神道を聞き遂に宮川を渡りて伊賀路よき木津川を下り大和春日宮に
 謁し立野三輪初瀬を經へ櫻井谷及び飛鳥社をすぎ多武ノ峯に登り吉野
 に入り南朝の古跡を吊ひ高野山を攀ちて大師の遺蹟を慨し觀心寺に遊
 び後村上陵を拜し難波に出で應神仁徳の諸陵を過ぎ堺府より住吉社に
 詣て遂に大坂を經て有馬温泉に浴す五月朔再び有馬を發し八幡山崎寶
 寺東寺を歷拜して京師に入り淺見綱齋に謁し又度會延經を訪ふて對馬

卜部家龜卜法を學び加茂社競馬を見み比叡山日吉七社を拜し安部泰福
 卿に謁し曆道の口傳を受し遂に六月朔日を以て海陸恙がなく國おかへ
 る因て日記東遊紀行二卷を著す

是より先き本國の式社湮没して社地神名を知らざる者多し秦山苦索數
 年漸く端緒を見る因て度會延經に謀り粗其稿をあす寶永三年命あり稿
 を抱て上京卜部兼敬小至り其閱を受々しむ兼敬感賞し跋文を作て曰く

右社考者一卷當國太守藤拾遺豊房朝臣令家士考註焉神之所別社之所
 傳照然如視舊事非好古博洽之人誰得爲之子感喜之余聊加一語了寶永
 丙戌仲夏日神祇管領從二位侍從卜部朝臣兼敬

五代藩主豊房公之を嘉して有司に勅し秦山に謀りて國中廿一社を修造
 せしむ未だ果さずして公薨じ事又已む全四年四月六日山内規重の事に
 座して家に禁錮せらる而も其罪にあらざるなり九月十六日神代卷鹽土

傳を著はす十月六日中臣被摺土傳を著す屏居十二年毫も怨心無く恐懼謹慎唯學是れ勤め其憂を知らざる者の如し享保三年村中に出づるを免さる此年病で歿す年五十六土橋氏を娶り五男一女を生む多く夭す長子丹四郎垣守其學を繼で家聲を墜さず秦山の學神道を以て經とし儒學を以て緯とす専ら先師闇齋の衣鉢を傳ふ而も闇齋没后澁川春海度會延佳等に親交し頻りに口傳を受け獨立別に一機軸を爲す其闇齋門に在りて神道を信するや同學の先輩淺見綱齋佐藤直方等書を以て之を諫む然も遂に従はず其學素より醇乎として醇なる者にあらざるも獨力和漢の學に涉獵して旁ら天文星象お通じ著述等身以て南學の己に絶ゆるを繼で又文運の再興を計る其功決して少小あわらざるなり是を以て國人今に至る迄尊て秦山先生と稱し大儒を稱

すれば主として之を數ふ著はす所神代卷鹽土傳中臣被摺土傳俗説資辨全續篇保元大記打聞秦山集土佐國式社考元享釋書抄東遊草等數十卷あり門人の中有名な者美代敦本、入江正雄、奥宮正明、安養寺禾麿、川谷致眞、齋藤實純、澤田弘列等あり皆其學を傳へて一家を成すと云ふ伴藁蹊の閑田耕筆に曰く儒家の内新井白石貝原益軒伊藤東涯土佐の谷氏の諸先生の如きは國朝の人たるに耻さるといふ可しと又瀧澤馬琴が燕石襟志に曰く後醍醐院足利殿お誑かれ玉ひて山門を出させ玉ふ時義貞朝臣聊も恨み申す氣色なく一宮尊良親王を供奉して越路に赴玉ひたるはいと難有心操からすやこの理は已に谷重遠も論じたりと云ふと藁蹊馬琴と皆近代の名士而して秦山を推尊し重きを置く此の如し以て其人の才と學とを定む可し

○三宅尙齋

三宅尙齋通稱は丹治名は重固尙齋と号す山崎闇齋の門人なり壯歲激昂氣を負ふて阿部侯に仕へ諫可かれざるを以て病を得て官を辭せんと欲す因て龍を被り忍城に幽せらる三年獄中血書して狼、獐、白、雀の二録を著とす後赦されて京にりへる

享保六年七代藩主豊常公の時家老山内規重新お興こり賢おして學を好み天下の人才を抜て君家の師範をなさんと欲す因て七十人扶持を以て尙齋を江戸に招き其侍讀とす尙齋時に年六十其年三月京師を發し江戸芝藩邸に來寓す其初めて講席に上るや入徳の式として左の數節を講す

孟子曰天下達尊三爵一齒一德一朝廷莫如爵鄉黨莫如齒輔世長民莫如德○孟子曰人之所以異於禽獸者幾希庶民去之君子存之○公都子曰均

是人也或爲小人何也○孟子曰公明義曰文王我師也周公豈欺我哉○書

曰若藥不瞑眩厥病不瘳

講畢はて藩主又入學の式を行ひ事具さに鄭嘯をさばむ

豊常公嘗て問ふて曰大石良雄と義士となす可き哉尙齋答えて曰く眞の忠臣にあらず候又問ふて曰く何の故ぞ尙齋曰く容易に辯し難し臣別に意見書あり請ふ他日之を進めんと公是より快からず赤穂復仇の諸記を集め頻ふ考訂して尙齋の説據る所ありやを議す後遂に尙齋の説從ふ可からずといひて儒學も餘り頼もしうらずといひ給へりとぞ

全年八月規重病て歿す尙齋知己を失ひ落莫の感あき能はず遂に辭して京にかへる寛保六年正月二十九日卒す年八十尙齋享保六年三月を以て聘せられ全八月辭し去る藩邸に居るもの僅かに五ヶ月門人其言を筆記して一書を作る易退録と曰ふ

○宮田定則

宮田定則幼字は辰之助通稱は用藏世々安藝郡安田村に住す父を宮谷玄格と曰ふ醫を以て業とす定則年甫めて十六南壁庵に從ひ京の上り醫を淺井習伯及び武藤以仙に學び又關牧庵を介して儒を淺見安正に問ふ壁庵歸國後醫業を廢し専ら儒學を攻め終に亦安正を師とす(其定則の名左傳劉氏の語によ)定則京に在る十余年學已お成り國に歸り帷を城東廿代町に垂れ子弟を教授す從遊の士極て多し常に四書近思錄を講す戸部愿山南惠山等皆此門より出づ性洒落にして酒を好む議論行事人の意表お出る事多し伊藤仁齋の門人定則に謂て曰く我師は程明道許魯齋を好みたり足下の師は何を好む答へて曰く我師は蕃椒醬を以て下物とし熱酒を飲む事を好むと聞く者絶倒す又一夜某家に飲む大に醉ふ歸路山田町の橋上お仰臥す夜を警む者之を誰何す答へて曰く宮田用藏天文を

窺ふなりと

延享元年仕へて徒士となり俸三人口を給す門人來り賀して曰く先生今にして後始めて士藉に上る某等亦當に士を以て先生を待つ可しと定則聲を勵まして曰く余從來官事を以て子等と交はるに非ず子等が言の如くなれば疾く去て再び來る事勿れと衆皆謝して已む寶曆二年藩主其勤學を嘉し之を留守居組に進む翌年十一月歿す年七十八潮江要法寺山に葬る定則年老て子なし然も他人の子を養ふて以て嗣と爲さず是に於て家絶ゆ谷秦山嘗て山田野にある時門田某ある者之を訪ひ談定則の事に及ぶ某口を極めて之を誹る秦山曰君又云ふ勿れ今日一藩の士畧は文字を識り忠孝の道を知る者豈に定則の功によらずや彼微せば一藩の士皆盲人ならんのみと後藩主福原某名文をして定則の後を繼がしむ以て徒士となす

○宮地靜軒

宮地靜軒名之介行通稱は藤彌靜軒と号す幼より學を好み谷秦山の門に入て苦學し厚く師説を信し能く其旨を得たり寶永中舉られて留守居組末子列となり知行三人扶持を賜ふ藩主の命を以て緒方宗哲の門に入り從ふて京師に上り伊藤東涯に學ぶ居る事歲餘おして還り書を上つりて曰く先に命あり臣をして緒方氏の門下とならしむ臣就て學ぶ茲に日あり然るに其學術臣終に之を信ずると能はず敢て辭すと藩主怒り其祿を奪ひ兄右衛門八某をして之を遠地に置き人と接する莫らしむ乃ち高岡郡宇佐村に屏居す

享保三年請ふて京お上り市中に住す五年八月藩主就て俸五人扶持倉米二十石を給し扈從格となし命して國に歸らしむ尋で侍讀となり俸若干を加給す常に藩主に従ふて江戸に行く後老を以て職を辭す天文三年新

お祿百五十石を賜ふ藩例毎年正月十一日馭初の式あり有祿の士皆戎裝して馬に騎り馳驅す一藩以て重典とす但儒家は醫師と與からず靜軒自ら武士おして儒者に拔擢せらるゝを以て屢騎せんを請ふ藩故法に拘泥して許さず靜軒因て祿を奉還せんとす是に由て譴を蒙る後遂に允を得て寛保元年七十歳にして始て甲冑を被りて騎す人其壯を賞す寶曆三年九月歿す年八十與子談一卷を著はして以て子孫を戒む爲齋春樹孫水溪仲枝相繼で學を傳へ並に家聲を墜さず

○桂井素庵

桂井素庵初名は建又伯後光實と草む字は新助又又三郎といふ素庵居易齋良山東谷等皆其号なり曾祖父利卜紀伊根來蓮花谷に居る天正十三年根來一揆お党し豊國秀吉の爲め陷る所となり逃れて土佐お來り長曾我部氏に仕ふ姓名を革め岩利庵といひ醫を業とす己にして長家亡ぶる後

浪人となり吾川郡長濱村に住す中世に及び商業を事とし家道漸く繁昌す父光直の時造酒を商ひ城下新市町(或曰紺屋町)に移住して根來屋と号す母と岩戸氏承應元年を以て生る

幼より學を好み又書を能くす黒岩慈庵見て之を奇とし親く自ら業を授く十三歳の時長短の詩三百余首を作る其親鸞上人古跡に題する句に曰く瞿曇昔日成何事漫惑人心害自深と

寛文十二年上書して祖先の系統を申訴し其親戚種崎浦庄屋門田三右衛門が跡目を相續し郷士とならん事を請ふ官之を許す是より姓名を革め桂井素庵と号す是後又居を城北秦泉寺村東谷に移し田地を購ひ卜居の地とあす是より又東谷耕庵等の号あり

延寶八年故あり其家僕を殺害し讎を蒙て高岡郡宇佐浦に謫居す讀書の室二軒を構へ一を居易齋と号す筑前の學士貝原益軒之が記を作る一を

素庵と号す舊師黒岩慈庵之が記を作る是より先き野中氏廢黜の後本藩の學士皆相踵で暇を請ふて國を出づ舊師黒岩慈庵は己に江戸に在り筑前侯に仕ふ其他一時交とる所谷一齋山崎闇齋大高坂芝山等皆散して四方に往く獨り谷秦山留つて國に在り秦山新年の寄詩の跋に謫居愈々久者詩句倍工也余亦當世齟齬之士一變將至於道の語あり後十二年赦に逢ふて秦泉寺の舊廬にかへる時勢の轉軻を見て落莫の感なき能はず數々上書して國暇を請はんとす藩許さず是より心を塵事に絶ち志を文墨に委ぬ初慈庵國を出づる時明道先生の眞像一軸を授く以后年々元旦床壁に掲げ之を拜し其像に向ひ經を説く二十余年寶永三年五月二十六日卒す年五十五秦泉寺山邸地に葬る文化十年北原秦里石を建て墓に銘す曰く豊城之劍、荆楚之璞、之沒有時、邈焉其跡、世無下雷、維新空逝、芳圃所存、勿動斯石、と

素庵書を作る初諸家法帖を習ひ後佐々木玄龍お學ぶ筆法雄渾氣魄莊宕世以て馬場一梯と併稱して海南の二大家となす著はす所素庵文集あり人となり又勤苦事を爲す精慎倦まず其十三才より晩年までの日記あり今猶現存し遺族北原氏に傳ふと云ふ

○大谷養正

大谷養正字は聖功父を休意と云ふ安藝郡安藝浦の人にて城下に來り書を業とし早く歿す母年猶若し節を守て再嫁せず親佑隣保之を慰諭する頻あり是に於て遂お其兩耳を斫り決意を示す人皆其貞烈に驚く四代國主豊房公聞て之を奇とし乃ち男養正を儒臣に拔擢す養正朱子學を奉じ資性温厚博學多通にして文章に工なり元祿十三年公薨するや特に撰ばれて碑銘を撰す尋て又五代六代國主豊房豊隆二公に従ひ屢江戸お赴き侍讀となり祿百五十石を賜ふ

養正の母人となり賢良婦道に通し常お之を薰陶戒諭し曰く幼少の時學問して父の書を讀む能はざるは人おして人におらず養正是より發憤大名をなす其素質の尊きに由ると雖も亦賢母教育の功なり

享保元年八月十日江戸お歿す享年未詳

○美代敦本

美代敦本又厚本通稱は傳太郎初名は元剛後改免て重勝重本といふ晚又敦本と稱す城東廿代町に住す因て廿代山人と号す其先は築前博多の人曾祖を市村民部少輔元重と曰ふ豊臣秀吉に住ふ祖久右衛門成元初めて小早川氏に住ふ小早川氏亡ぶるに及び移りて土佐に住す父三白休齋と稱す

に至り本姓美代に復す敦本性直率にして強識なり初谷泰山お學び後上京して淺見綱齋に師事す學成りて國に歸り町浪人と云ふを以て城東廿代街お居し生徒に教授

して以て自ら活す筈瓢屢空して晏如たり宿毛の家老山内半左衛門氏興延きて賓師となす一日往きて書を講ず時方さに冬にして天太寒し敦本敵れたる單紙衣をつけ唇青く聲頓ふ氏興之を憐み自ら綿衣一領を興ふ敦本拜して之を受け即ち復た之を返して曰く忝く恩恵を受け感荷の至りに勝へず然も僕幼より他人の紋章ある衣を服するを好まず敢て辭すと終に受けず

長子定七郎成章性太だ不頼隣人相與に告げて曰く先生宜しく之を官に首して罪を請ふ可し然らざれば先生亦終に其連累を脱る事能はずと敦本之を謝し即ち成章を以て居を仁淀川西高岡村に移し戒めて川を踰え東する勿らしむ蓋し私に追放の例に習ふなり且つ自ら城下に出づるも必笠を被りて微行す其意謂へらく我已に子を教ゆる能はず又之を訟ふるに忍びず比隣の厭ふ所とある面目の人に對す可き無しと居常味爽に

起き梳剃を怠らず人其故を問ふ曰く某所士おして貧し明日餓死するも亦測る可からず聊か以て死後の醜狀を免れんと欲するのみと享保十九年病で高岡村に卒す著はす所の文數篇あり浮津孝子傳等尤も行はる男成章後行を改め醫となり業大に行はる杏林私考楷梯十七卷を著はす

○谷垣守

谷垣守通稱は丹四郎号は塊齋秦山の長子なり母は土橋氏元祿十一年を以て生れ父の謫所山田野地村に長ず幼より家庭に遊ひ能く其業をつぐ父歿する後京に赴き玉木葦齋に従ひ神道の奥秘を受り又屢々江戸に遊び諸家と交り力學篤行其家名を墜さす

享保六年八月天文儒學を以て五人扶持を賜ひ格式御留守居組に列す全十八年秋切府十石を賜ひ新小姓に進み會所に於て儒學講議を奏す元文元年更に小姓格に進み延享三年切府十石加増す寛延三年又二人扶持切

府四石加増す

享保十五年二月上疏一封を以て組頭中山覺兵衛により之を奉行に呈す
奉行曰く外臣上疏古例なしと之を斥けん欲す覺兵衛曰く此事素より
例多し奉行怪しみ問ふ曰く僕曾て朱子行狀を見る上疏數回あり垣守學
朱子を宗とす蓋し之を據るなふんと奉行以て然りとし乃ち之を八代國
主豊敷公に達す公嘉納す爾後言路漸く開く人々意を竭して上言を得る
垣守之が嚆矢たり是時中山氏七絶一首を賦し垣守に贈る垣守韻ふ次し
之を答ふ其詩左の如し

呈谷先生

金門鉄健漸將披。一箇封書勸机前。分破華山千萬里

風流千載白梅邊

居士不知文字雖然如此先生黃金義鉄漢心不堪感慨效俗而呈微辭一

章矣

居士適來

奉以中山賢翁高韻

雪中松柏入臣節、感慨甘芹殘臘前、幽谷雖無鄙衍律、懇

祈諫牘至君邊

野生不知酬和之体且高韻褒稱過常無由報謝謹書懷呈左右以備一笑
之興人高覽之後投爐中則幸甚

谷垣守稿

詞句巧からずと雖も又其一時知己遇合の概を見る可し

延享三年江府に在る時岡田磐齋の甥聳めて浪人なる岡田彌左衛門酒井
修理大夫家臣小島十助徳田九郎兵衛の三人皆磐齋の門にて神道に通ず
垣守の名を慕ひ神代卷を講せん事を請ふ垣守爲めに定日講席を開き一

席も欠々す之を講し。朱批奥書を加へ神代早分草と題し一書を成す寶曆二年三月晦日五十五才にして歿す池内氏を娶て五男四女を生む長子丹内眞潮家を繼ぐ二子大吾垣雄垣庵と号す初櫻井清八郎と稱す博學又家聲を墜さず旁ら醫を嗜む天明八年五十七才にして歿す伊藤氏を娶て神作郷兄を生む三子萬六好井又學名あり兄丹内眞潮に嗣て家を承く五子武平幸守四女皆他に適く子孫振々世以て積善の餘慶とす著はす所神代事跡考土佐國蠶簡集拾遺土佐鏡草見憎草等あり

○齋藤實純

齋藤實純俗稱は平兵衛初龜之助友之助九八郎と云ふ其先は讃岐國藤目の城主齋藤備中守と云ふ別當實盛の裔なり其子下總守師郷仙石氏に屬し天正十四年豊后に戦死す其子七右衛門實勝天和の役大坂に投じ落城の後土佐香美郡廿枝村に流寓し寛永中遂に山内家に事へ馬廻格に列し

祿三百石を食む其二子吉之丞實之慶安四年別に拔擢せられ家を興す實純は即其子あり

元祿六年實純父に繼ぎ初借用奉行とあり後亦浦奉行吟味奉行となる格式累進して馬廻りに列す性廉直にして學を好み神儒の道を谷重遠に學び大田道灌流の軍學を武林洞川井次郎左衛門に學び許可を受く又天文術も通じ才藝に綜なり

元文五年閏七月十二日某日自ら死期の近きを知り生中遺願して歿後の事を謀る家を其子友之助に譲り且つ親族を會して後事を托す酒を命し訣別即ち逝く人にて唐の王鏡に比す著はす所旭光院君遺事一卷あり墓は奏泉寺山秦山の西に在り男四人あり長は吉之丞實孝小字友之助二は和三郎實保三は圓四郎實俊四は又五郎直持と云ふ

○陶山南濤

陶山南濤名之冕字は尙善南濤は其号なり本姓は井戸氏初め生島春郷と稱す後陶山氏に改む祖井戸松庵始て本藩に仕へ祿三百石を受け醫官となる父を玄悦と云ふ南濤は其二子なり幼にして家庭に學び長じて京師に往き伊藤東涯の門に入り又孫吳の兵法を究む國に還りて醫員となり俸五人口廩米二十石を受く享保中故あり國を逐はる因て復々京師に適き講書を以て業となす尤も小説に長ず時に岡島冠山、晁玘、岡白駒、秦松峽、陶山南濤を以て稗官學五大家と稱す後秋月侯に仕へ專兵學を唱ふ已にして辭して京師に還る最後浪華に移り生徒に教授し以て身を終と云へり

○中村嘉種

中村嘉種字は仲武通稱は惣二郎号は七友齋世々幡多郡尾浦に住す嘉種又延寶六年全所に生れ八才にして三崎に移る幼より學を嗜み十九にし

て京に上り伊藤仁齋に學ぶ仁齋歿后江戸に往き水府儒學三宅觀瀾に學ぶ寶永中學を以て本藩に聘用され留守居組末子列となり三人扶持を受く數藩主に扈して江戸に往き後祿數十石を加賜せられ大扈從格に進み侍讀とある延享元年九月六十七才にして歿す

○戸部愿山

戸部愿山通稱と助五郎名は良淵愿山は其号なり又家鏡川の北岸唐人町に住するを以て韓川と号す其先尾張の人後播磨に移る曾祖某始て土佐に來り長岡郡本山に居る父義助散樂謠曲を以て藩主に仕ふ良淵其業を繼ぐ而るに其志儒學に在り富永惟安宮田定則關牧庵等を師友とし道義を研究す

享保中家業を修むるが爲め京師に之き旁ら經學を小野鶴山に問ひ神道を玉木葦齋に學ぶ藩主數々其家業を專修せざるを責む而も遂に志を改

ひる能はず後寶曆十年に至り藩主國校を建つるを計り特に愿山を命じて教授役とし留守居組に擢し三人口廩米八石を給す未だ幾くならず祿若干を加へ扈從格に進む復た請て京に上り小野鶴山に就き學ぶ事數年盡く其師説を手録し還る

愿山又天文を川谷蘄山に歌道を萩原宗固に醫を香川大冲に有職の事を林某の門人お劍法を森下某に學び兼て佛典お迄り涉獵せざるなく博覽該通人能及ぶ者なし且つ神道の奥秘を玉木葦齋に受け祖先を祭るお神儒の式により浮屠法を用ひず寛政七年十二月廿一日八十三才にして歿す著はす所隨筆お韓川筆話數卷あり野見氏の子徳之進を養ふて嗣子とす又學問あり教授職たり

○宮地爲齋

宮地爲齋通稱之喜八郎名は春樹爲齋と号す靜軒介行の二男なり父お嗣

で儒者となり祿百三十石を繼受す寶曆年間京に往き本居宣長萩原宗固お國學を西依成齋に儒學を學ぶ已おして業就り歸國す同十年教授役となる翌年故あり職祿を辭す藩主慰諭して許さす後祿二十石を加へ山奉行お舉らる數年にして罷む天明五年歿す年五十八寶曆八年京師遊學中和州吉野に遊び櫻花を賞す哥あり

藏王堂の花を手折りて

手折とも一枝はゆるせ吉野山花の名殘の忘れ形見に

○丁野南洋

丁野南洋名は榮字は君美通稱は彦十郎南洋又鼓山と号す父は小西彌二右衛門と云ふ城下買人なり南洋幼より機敏學問を好み又牙籌を把らず長じて秀才古文を好み左氏太史公韓氏の書を研究し辭賦に耽る

初先江戸に赴き宇野子迪に學び後京師お至り皆川筠齋に學ぶ近江の梅

辻春樵と相識り其比隣に住し日々往來す春樵弟烈親をして南洋の弟子たらしむ寛政九年比叡山山門の教授となり諸儒と經を講す享和二年浪華に遊び病不罹り二月四日歿す年四十九文化元年梅辻春樵其遺文若干を集め鼓山房遺稿と題し自ら序を記し之を梓行す

○植田桂南

植田桂南名は順字は子和通稱は清之丞桂南又咬菜堂と号す藩の小吏たり性廉潔にして博學強記なり神儒の道を谷真潮戸部愿山に天文曆筭を川谷蘭山に醫術を土居若山に學び其他山鹿氏の兵法伊勢家の故實に通じ平居好で韓非子を読み經濟に長せり家素と書籍に富み且つ寫字を善くす故を以て自ら騰寫して万卷を貯ふ壯にして授教館の筆吏となり軍考を寫すを命せらる當時此書世上に乏し桂南別一本を寫し家に藏せんと欲す館制携へ歸るを許さず桂南乃ち家に暇り之を暗寫して一字を

誤らず其強記此の如し後諸官を経て功績頗多し天明八年五十七才にして歿す著はす所桂南漫錄。齊家必用。說齊錄。禦侮錄等あり

○脇田東川

脇田東川名は讓字は叔子初名は景虎字之子皮東川は其号とす通稱は啓七縫箱師惣七郎なる者の子なり外貌愚なるが如くして奇才あり儒及び醫を丁野南洋に學び天文を細井鏡淵に學び詩文を善くす凡百の書籍通讀百過せざるは無く盡く之を暗記す但文選のみ自ら言ふ未だ通せずと一文人之を窘蹙せんと欲し文選中難解の文を以て問て之を試む應答流るゝ如く一字を緜滯せず乃曰此書未だ課定に至らずして廢すと雖も亦通讀七十過に及ぶと常に書を讀て爨炊の事を忘れ飢れば則生米を掬し且つ咬み且つ讀みて輟むことなし

嘗て京師に之き皆川淇園に從て學ぶ已に歸りて學益進む寛政中南京の

商船安藝郡羽根浦に漂着す藩主東川に命じて往て筆談せしむ初古文辭
 体を用ゆ船人解する能とす更めて小説体を用ゆ乃ち解する事を得て答
 問泥ます船人喜び且つ感ず東川又相術に妙あり自ら命期を知り妻を娶
 らず醫を業とし獨居す歿する前盡く其詩文若干卷を取り之を焚く曰拙
 作何ぞ後々傳ふるに足らん適以て耻を遺すのみと寛政十二年五月歿す
 年三十四

○谷眞潮

谷眞潮初の名は舉準通稱は丹内北溪と号す丹四郎垣守の長子なり母は
 池氏享保十四年を以て生る資性英悟家庭の教を受く己に熟す乃ち屢東
 遊し名家に交はり神儒の道に就て一派の識見を立つ

寛延元年學業修行にけき三人扶持を給とり寶曆二年七月父迹目高の内
 七人扶持切府二十石を受け小性格を以て之を繼ぎ藩主の侍讀とある全

十年學館建築に依て教授役となる宮地春樹戸部愿山と同僚たり是れ本
 藩教授役を置く始なり明和九年切符四石加増す安永七年正月新知百五
 十石を給ふ但し是時扶持切符は除く全年二月浦奉行となる安藝郡室津
 港は元と野中兼山の開鑿する所なり而るに今に至る迄港口中島と云ふ
 礁あり頗る船舶の出入を妨ぐ眞潮是に於て官ふ申して工役を興し之を
 除く藩主其功を嘉し白銀若干を賜ふ天明三年七月役料三十石を賜はる
 全五年五月病を以て辭し罷む
 眞潮少より慷慨にして世の風俗頹敗を歎き之を匡濟する志あり天明七
 年九代國主豊雍公大に國政を改革し群才を登用し百度を一新す即ち眞
 潮を拔擢して郡奉行兼普請奉行とし物頭格に進め官祿五十石を増給因
 て下規共に二百石となる尋て大目付役となり前々給する所の官祿を以
 て世祿に併せ別に官祿五十石を給す眞潮辭するふ年老多病且つ性素と

粗暴にして重任に堪へざるを以て藩主慰諭して許さず藩制未だ儒者を以て樞要の官に充つるの例なし是を以て譏言百出或は樂書し眞潮の門扉貼するに至る眞潮之を見て和歌一首を作り其旁に貼して曰く

言とい言へ言ふ甲斐も無き老の身の言はるゝも又亦老の花うか

此時に當り藩主精を勵まし治を圖り苦辛碎勵斷然積年の宿弊を一洗し人材を登用し言路を開き學校を建て文學を勵み或は藩士の文武を獎導して時々其技藝を試み或は孝子貞婦有る毎に門に表し物を賜ひ務めて名教の裨益を計り上下相和し以て中興の偉業を致す世に天明の大改革と云ふ實に眞潮等幹旋の力許多なりといふ

寛政元年藩主卒す眞潮亦全三年病を謝して職を辭す乃ち後教授役となる眞潮學洛閩を本とし雜ゆるお諸家の説を以てし兼て意を兵學に潜め尤も孫子を好み神道亦家傳お依らず一己の機軸を出す故を以て父垣守

と合とす垣守憚ばからずして我家惡魔を生すと云ふに至る而も遂に如何ともす可からず乃ち曰く汝所見亦一理あり然も我家神道傳來の書は願はくは收藏散佚せしむるなかれと吉本虫雄垣守の高弟にして眞潮より長せめ晩年評して曰く初我北溪を以て其父お及ばずとなす今にして之を思ふ其人物父に過ぐる數等吾輩梯を能く及ぶ所にあらずと全八年二月十五日藩主特旨を以て又五十石加増翌九年十月十七日卒す享年七十一秦泉寺山に葬る立田氏を姫りて二男三女を生む長丹藏幸躬二十五才にして歿す二三次亦夭す立田氏歿后別府氏を姫り一男一女を生む三楠八宅守又二十歳にして歿す一女安並氏お嫁す彌三八雅景を生む又有名の歌人也二女皆他に嫁す弟万六好井をして家をつがしむ著とす所左の如し

流澤遺事

家内獨見書

北溪文集

北溪雜集

孫子秘解

御國の學び 舊事記偽撰考 論聖 論佛 神道本論 軍

役考 古事拾遺

眞潮平生學問の外政治を好み活儒の風あり其人となり豪懷不羈にして
細事小節に拘わらず秦始皇帝を漢土前後に無き大器量者と論せる如き
是なり孫安並雅景の筆記に曰く宮地春樹翁予が父の謂ひしと丹内と云
人は大綱の擧る人にて小節は論ずるに足らぬ人也といふにも左様おあ
りしを見ゆ然に其大綱云々お絶妙の所ありて宮地春樹久徳直利などの
梯の届かざる所ありしと見ゆる也上に云春樹の先生を評して大綱は擧
り細目は不詳と論せし由を我父の先生へ對して喜八郎先生箇様に申さ
るゝと告げれば北溪翁喜八もわしをは能う見て居るぞのうと申されし
由云々とあり所謂好漢知好漢もの知己の評言以て其人と材とを定む
るに足るべし

門人島崎半助持幸其言行を録し北溪先生遺事といふ徳永達助千規亦其
付録を作る

○箕浦行直

箕浦行直通稱は専八名は行直秦川と号す祖先清和源氏に出づ父は左平
太正路と云ふもと御馬廻おして野中氏の付與力なり母は松田氏兄弟三
人共に儒學を以て家を興す長と即ち行直仲は即ち右源次直露季は即ち
三郎貞吉なり

行直初め納戸役を務め數祿秩を加ふ寶曆五年四月江戸に官遊し稻葉迂
齋に就て儒道を學ぶ天明改革の時年六十余才谷眞潮五藤正厚と共に大
目付役となり大政釐革の任お當り頗る其力を盡す平素に在りて兄弟友
愛尤も厚く善く父母に事へ人間言おし藩主其孝友を嘉し行直を召し親
しく衣一襲を賜ひ父母に著せしむ時人羨嘆し人家禮讓を行ふ者あるを

見れば箕浦風と云ふに至る

行直兄弟三人又衛生の術を好み具原益軒の養生訓を服膺す故に皆老健して壽を得たり行直七十五才の時夙興記を著す其畧に曰く

寶曆九年己卯予江戸に在りし時六月六日稻葉迂齋先生の許にて小學内篇所載の弟子職學則の講説を聞事を得たり時に先生一坐の諸生に對して語り賜へるは諸君も嘗傳へ聞賜ふならんかし山崎先生弟子に此夙興の事を教訓し給へる一言有凡學に志す者朝日出て起出る徒に道理を辨へ居る者おし汝等書を敬めよやと有しとて室の直清先生其聞ける所を常に戒賜ひしが此事誠に然り凡朝寐する學生は必惰氣にして晝寢をせざる事おし適仕官する人などおは其勤事に依て夙に起るも有又晝寐せざる人も有と雖も皆自己身上に知識する所ありて然るにあらざる故能久しきを保つ事成りがたし諸君省み賜ふべし云々

と予此戒を初て聞しより心中お深く悔耻是より毎朝味爽に起出で凡疾病のいふ可きにあらざしては朝寢晝寢する事おく公私の勤む可き事業を怠らざらん事を心中に誓ひ力め行ひける云々年を積み事久して自然に常となり何時となし難き事を忘れ今かく老に至りては猶自若たり云々指を屈し數ふれば歲月の逾邁今を距事已に四十二年あり直彝をして此年月の日數を通計せしむるに八万有四千九百七十余ヶ日なり但其間病累憂故のやんことなきあるを除きぬとも大抵万有余日程の勉める可し嗚乎我先生の門弟子を教諭し給ふの懇倒なるや至れりと云ふ可し云々

歿する年八十八弟直彝貞吉亦七十以上を以て歿す皆其學の實踐お本くを見る可し行直己お歿す繼なし直彝の子次太郎直充を養子とす又儒學を以て家名を墜さず

○箕浦直彝

箕浦直彝は行直の弟なり俗稱は右源次字は迂叔江南立齋膽齋進齋の号あり幼少して富永惟安に學び后戸部愿山に學ぶ又川谷蒔山に就て曆術を學び森下權平に就て劍法を學ぶ

寛延元年京師に行き業を西依成齋澤田一齋に受け寶曆五年兄行直に従ひ江戸に赴き留まる四年諸家に入出し益其學を勵む全十年正月新小姓お召出され三人扶持切符十石を給はり教授となる安永某年五石加増し天明四年小姓格に進み二人扶持加増し享和二年五石加増す

是より先き寶曆明和寛政年間九代藩主豊蔭公十代藩主豊策公に倍駕して江戸お赴く凡九次其間藩邸お在る稻葉迂齋小野雀山野田剛齋多田東溪の諸門に出入し常に教を受く直彝交際極て博く一時有名の士臂を把て往來相從遊せざるあし今男忠

平書す所の立齋行狀畧記おより其概名を記す(原文通稱を書す多きもの今畧して雅号に易ふ)

江戸 柴野栗山 尾藤二州 古賀精里 伊勢貞丈 萩原宗固

黒澤雅岡 塙保巳一 狩野洞春 市川寛齋 澤田東江

關鳳岡南樓父子 高山仲繩

薩 赤崎海門

藝 頼 春水 全 杏坪

大坂 中井竹山仙坡父子 木村世庸

尾 紀 徳民

備 和田蘭石

肥后 藪 孤山 ○辛崎辛藏

若 山口風簷管山父子 ○杉田玄伯

水戸 長久保赤水

時に白川城主松平定信公幕府の執權となる直彞の名を慕ひ黒澤雅岡を介して自ら著はす所の永言録三卷を贈り且つ忠孝二大字を書して之に副ふ人にて榮とす

學風は望南軒に出で程朱を尊信し文章詩賦に工ならずと雖も經義に邃に當時第一たり諸家往復の書翰今猶は家に藏して數櫃に及ぶと云ふ文化十三年八月二十七日歿す城北秦泉寺村天塲山東の墓に葬る著書左の如し

- 大學 小學 論語 孟子 中庸 近思錄 詩經 書
- 經 以上講証
- 康濟譜和解 九經類聚 詩文和歌集

○松田思齋

松田思齋名は覺字は天民通稱は覺助其先秦氏に仕ふ后山内家に仕へ郷

士隊長となる父滋定に至り進て馬廻となる田中氏を嗣て三子を生む長滋清家を襲ぐ次之即ち思齋なり幼より學を好み藩儒眞邊箕浦の二氏に就て學ぶ九才己に詩を能くす長するに及び東西に歴遊し江戸に在て頼春水に學び又安藝小遊で山陽等と交を結ぶ嘗て語て曰く儒臣の仕途限りあり大に爲す有る能とす獨り人才を育し上用に供するのみと山陽又以て然りとす

己にして國にかへる文化九年藩主其學を嘉みし擢て、教授役とかし常に東行小倍駕して日に講讀小侍す城北江口上橋の東に宅す門人遠近來集室爲めお容る能はざるに至る人となり博學敏文經を説く明晰快痒を搔く如く日省月試の法を立て子弟を砥礪す病篤きに至り猶ほ講をやめず其勤此の如し而して一に躬行實踐を以て本とし其親族知己急あらば臂を振ふて赴き救ふ事平けば欣然共に樂み毫も徳色を諸々業を受る

者皆畏れて之を愛す文政三年歿す年四十五土佐郡秦泉寺天塲山に葬る
 門人二百人爲めに碑を建つ友人頼山陽文を作る其銘に曰く
 千里之馬。出。門。而。蹶。雖。爾。蹶。哉。其。志。不。歇。悠。々。驚。駘。存。沒。何。限。天。
 塲。之。山。埋。此。駿。骨。死。而。不。朽。伯。樂。所。拔。

○宮地仲枝

宮地仲枝通稱は莊藏号は水溪と云ふ爲齋春樹の長子あり性明敏にして
 幼より谷眞潮に従學し博聞を以て聞ゆ武伎を嗜み和歌を善くす儒者を
 以て自ら居らず數々江戸に往て諸家に入出し又塲保已一に従學し其群
 書類從の著を翼く嘗て聖堂に在り伊豫松山の儒臣岩原桐月と湯武放伐
 の事を論ず桐月は湯武を聖なりとし仲枝は之を賊なりとす議論激昂し
 て互に屈せず對論數日にして旗本某桐月に贊せし者先づ屈す乃之を咎
 む某遂に自殺す箕浦貞吉間に入り調停す藩命して仲枝を土佐に下し祿

三十石を奪ふ仲枝猶ほ其説を守りて動かさず后三十餘年を経て詩を作り
 桐月お寄せて曰く松山懸想縁邊々。僻境頑樵鬢已絲。頼有精神不灰盡
 至。今猶執首陽飢。と以て其平生氣概を見る可し後山奉行となり數年
 にして罷む文政中事に坐し祿を奪はれ城北久万村に屏居す後又赦され
 城府にかへる天保十二年歿す年七十四著はす所山内家年代畧記。彝寛
 公遺事。等あり

○山本日下

山本日下姓は源名は鸞字は文翼通稱は袖藏日下は其号なり享保十年六
 月三日城下唐人町お生る人となり温雅にして大度あり再遊京師に遊び
 博學洽聞詩文に長じ兵法武伎に通ず安永元年佐川家老深尾樂山公學館
 を其采邑に建つや聘せられ師範となる遂に質を委し其臣となる公爲め
 に廩俸五十石を加へ別に廩米四石を加ふ天明八年其老を愍み積年教育

の功勞を褒して致仕を許す幾くもなく病て歿す實に其年九月朔日なり
年六十四著述左の如し

論語私考 日下詩集 楠公記 左傳記 孟子說 聞見錄

世說新語補解 遊浦内記 日下先生遺稿

○山本玉岡

山本玉岡名は禮字は文進玉岡は其号にして日下の男なり天明八年父に襲て深尾家の教授とある溫柔靜默一に家範に遵ふ文化四年京師に學び三位清岡君等と交はり尤も信愛せらる全六年十一月卅日病て歿す年四十七始久万氏を娶り去る繼くみ池氏を以てす一女を生む弟桂を以て嗣とす門人黒岩龍溪墓に銘して曰く紹志述事都城成章死而不朽千歲之光著書左の如し

仁道論辨 玉岡遺稿 答猪飼敬所所示鬼神說書

○山本霞嶽

山本霞嶽名は敬通稱之祐之進霞嶽は其号にして日下の季子玉岡の弟なり
り明和二年五月六日を以て城下掛川町に生る幼にして天賦穎邁人英器と稱す長するに及び醫を修め能く其術小長ず宿痾固疾常醫の治す能はざるもの乃ち一匙之を起す遠近名を聞て治を乞ふ者門に滿つ性酒を嗜み家赤貧洗ふ如きも晏如たり文化六年兄玉岡歿してより嗣なし霞嶽乃ち其家を繼ぎ學館の頭となり醫を去て儒ふ就く天保十年四月十八日歿す年七十四佐川村中洞山先塋の次に葬る著はす所霞岳遺稿一卷あり

○山本澹齋

山本澹齋名は普字之昭徳澹齋澹泊齋皆其号なり通稱は初命助と稱し後義祖の名を襲て仙藏と更む祖先隼人長曾我部氏に仕ふ父名は孝節福富氏母は町氏澹齋は其季子なり寛政十年正月十八日を以て土佐郡長濱村

に生る幼にして風儀あり同輩と遊戯せず經史を松田思齋小學家亦貧
なり十六七の時醫を某小學ひ高岡郡炭方村に業を開く數年なり文政元
年二月佐川儒家山本霞岳の養子となり義叔玉岡の女に配して其家業を
繼ぐ幾くもなく名教館の助教となり義父と共に之に出入す天保元年教
授となる十年義父歿す喪儀力を致して家財を問はず喪に居る哀を盡く
す尋て其祿秩を恩襲して館學頭となり深尾氏累代の侍讀たり其間屢俸
を進め秩を増す記し盡くす可からず明治二年四月十一日歿す年七十三
全村中桐山先塋の次に葬る内外會葬者數百人に及ぶ私に諭して澹泊軒
昭徳儒士と曰ふ

人となり軀幹偉ならず短面大耳眼光人を射る性謙遜俗客を擇ばず博く
諸史に通じ旁ら小説野乘を嗜み尤も作詩に長ず蓋し山本氏日下以來澹
齋に至る迄四世文學を佐川小唱へ絃誦洋々而して詩風の大に開くるは

乃ち澹齋より始まる其病篤きや家人をして絶命の詩二首を書せしむ曰

天道何辭是死生古稀不恨命猶贏 如今若借壯年久見得二孫學生成

七十賢勞秋又春文詩教育逐年繁 如今自願只風月遺恨無毫報主恩

著はす所澹泊齋詩抄全遺稿あり齋藤拙堂坂井虎山奥野小山等皆其詩抄
の序を作る今家に藏し未だ梓に上せず男二人あり長は迂齋名は謙次は
竹溪名は轍並に學統を繼ぐ家聲を墜さず(但し迂齋翁と近年逝去す)

○黒岩龍谿

黒岩龍谿通稱は順之進名は順字之子進高岡郡佐川村の人なり父之雲東
と号す母は田村氏幼にして孤となり苦勞力行家業を修免旁ら醫學を學
ぶ家老深尾氏拔擢して名教館の教授に任し暫くして進で儒員に列せし
む屢京師に遊び皆川小石等諸氏の門に遊び歸國の後又領主の侍讀とな

る平素人に接す恭和温雅憚々として倦ます門人先後二百余人天保五年二月二十五日六十一才を以て歿す近藤氏を娶り一男二女を生す男名は毅二女皆他に適く著はす所龍谿小藻あり梓行す横倉山記あり寫本を以て行はる浪華の篠崎小竹墓に銘して曰く

相知乎心 何待傾蓋 己友其德 况又有藝 耳順而終

誰忍稱名 壽言無由 作斯碣銘

蓋し龍谿小竹と交はる十數年而も海山阻隔相訪問せず書信の往復に頼る起二句相知乎心何待傾蓋は之を言ふ也

○入交幽山

入交幽山名は允字は子欽通稱は卷藏幽山は其号なり父は本齋と稱す其先源氏に出づ家世城下に住す幼にして母に従ふて佐川に移る天資英俊少ふして算法を川谷氏に受け明敏人を驚かす又儒學を山本氏に學び解

悟透徹大に等儕を凌ぐ未だ壯ならずして郷校の助教に補し後特小命せられて教授に進む指導循々老ふ至り倦まらず生徒日に進む文政六年二月寵恩老を賜ひ男喬榮をして其秩祿を襲ひ他職を命ず全七年六月二十七日卒年七十五春日山に葬る二男一女を生む幽山居常詩を賦し文を屬し又劍を學び其奥伎を極む而天文の學最も長する所なり初め佐川の郷算學の良師なし幽山を得るに及び始めて通達する者ありと云ふ門人廣井遊宜墓に銘して曰く

夙通經典 立功鄉賢 育才成器 已老益明 九章之藝 推步究精 文而不朽 永貽令名

○廣井遊眞

廣井遊眞名は鴻字は千里通稱は喜十郎幽眞は其号なり家世佐川深尾氏に仕ふ父名迪徳母は許武氏幼にして風儀成人の如し入交幽山の門に入

て苦學粹勵す壯歲高知邸の留守役となり城下に留る年あり己にして更めて佐川にうへり大夫家の公學講者となる尋で文學教授となり筆學を兼ね又刀槍を教ゆ並に皆奧秘を傳ふ田村氏を娶り一男一女を生ず譜はずして離る繼ぐに桑原氏を以てす一男を生む長は靜修季は修道皆先づ卒す靜修の子正誠家を嗣ぐ嘉永六年九月十一日八十四才を以て歿す著書詩文集若干あり山本迂齋墓に銘して曰く

執德儉勤 不苟嫚戲 所事精密 不苟顛躓 惻輻接人
 謙冲養志 武乎所嗜 酷嗜文字 於戲真儒 容貌溫粹
 於戲名流 風韵高致

○竹村東野

竹村東野名之修字は靜夫通稱は節之進東野は其号也香美郡野市村の人父名は正教母は近森氏なり文化元年を以て生る

藩の家老桐間氏に仕ふ國校の教官欠員あり其後任を撰ぶ東野に如くはなし乃ち拔擢舉用せらる世以て異數とす文政十二年公務を以て江戸藩邸に在り佐藤一齋安積良齋山口管山諸氏の門に就學し六年を経て天保五年二月飯郷し家塾を開ひて子弟を教授す号して成美塾と曰ふ

空十二年六月帷を閉ぢ江戸に再遊し舊師を尋ね諸名家と交はり頻りお其學を上下し旁ら兵學を清水赤城お學ぶ全十三年四月再び舊塾を開き兵學測量の二科を加授す弟子漸く多し万延文久の際最も隆盛を極め寄宿生毎に十六七名を下らず後桐間氏藩主に陪して東行する事二度東野每お之に従ひ學業砥礪道益進む後全家會計官に任ず其素と筆數に巧なるを以てなり並に成績あり

慶應元年八月藩學の教授となり子弟就學の法あるおより家塾の業漸く衰ふと雖も前後業を受くる一千余人就中有名なる者中岡慎太郎本山只

一郎土方久元、西村亮吉、岩村誠一郎、安岡覺之助、宮地宜藏、大石彌太郎等なり。全二年七月一日歿す。年六十三。城北秦泉寺村天塲山に葬る。會葬する者遠近雲集數百人に及ぶ。門人私に諡して温知院修誘不倦居士と曰ふ。家老桐間松雲君石小大書して維東野先生之墓と曰ふ。友人岡本下方銘を撰して曰く

毛羽始成 出谷而遷 珠翠爛燦 回翔鶴班 其從如雲
 德音不諼 天馬埋骨 有列秦泉 猗歟豈特榮一代

東野人となり温籍樂易人に接す。吟域なく賢愚皆宜しきを待る。尤も講經お長じ間ま或は詠謔を挿む。童稚と雖も亦傾聽す。人々拈腹拊腹にして來り。屬鑿して去らざる。著はす所東野遺稿登岳紀行等あり。登岳紀行は天保十二年六月廿六日東遊途上富岳に登れる記文なり。初め

東野の其文を作る友人岡本水一方跋を記す。後參河本宿驛の宰富田氏に寄贈す。富田氏又是を郷儒宇都野君城名は並江江戶文客日尾省齋名と示に示す。二人激賞各古詩一篇を作り又富田氏を介して東野に寄せんとす。日尾氏の文中明月暗投猶逢披劍之怒。況於瓦石乎の句あり。嘉永三年十月東野復た江戸に赴く事あり。其十六日日本宿村を過ぎ富田氏お宿し翌日遂に二人に邂逅し。宇都野氏の古邸館に飲み醉話劇談互お胞襟を披き歡を盡くして別る。其夜席上相談して曰く此會不期にして逢ふ豈お奇遇にあらずやと遂に韻を分て詩を賦す。世傳へて佳話とす。東野の詩お曰く

遠追寒景向關東、此役須期勞力充、仁厚眼觀都鄙異、義方心感主寶同、雖無鷄黍三年約、恰似孔程中路逢、最愛偶然傾蓋所、寶藏寺外富田翁、

君城の詩に曰く

竹村君始見訪日尾省齋寓於余家席上分韻
落葉聲中掃竹亭、茶烟香裡啓柴扃、一時新舊迎良友、千里東西聚德
星、文字締交秋水淡、燈檠分影紫蘭馨、金尊盪酒愛遙夜、無月窓前
霜滿庭、

省齋の詩に曰く

三州宮路山中宇都野君城宅初逢土州竹村詞伯時詞伯奉命之江戶
己理行漿病未歸、今嘗此會又何奇、雲邊風急吹寒雁、霜外星高照碧
池、山水久爲會宿客、乾坤又得一新知、暫時傾蓋仍分袂、征馬如飛
不可追、

土陽叢書 第六編 土佐人物傳 上卷終

明治三十拾年九月卅日印刷
全 年十月二日發行

正價拾貳錢

著者 高知縣士族 寺石 正路

發行者 高知縣平民 片桐 猪三郎

印刷者 全縣平民 杉村 萬吉

印刷處

土陽新聞株式會社
高知市種崎町七十七番地



發行書林

高知市種崎町

開成舍本店

發賣書林

高知市本町下一丁角

開成舍支店

發賣書林

高知市本町三丁目

開成舍支店

東京	澤本	山中	小川	村岡	田内	廣瀬	森本	阿部	岡田	輪多
堂	吉	助	次	助	平	店	店	店	店	中村
安藝郡安藝町	高知郡高岡町	高知郡高岡町	佐川町	全	久禮町	長岡郡後免町	全	全	全	全
須藤	田下	三宮	牧野	大谷	小川	山下	高山	高橋	高橋	高橋
直太	利要	利要	龜太郎	龜太郎	龜太郎	龜太郎	龜太郎	龜太郎	龜太郎	龜太郎
吉七	吉七	吉七	吉七	吉七	吉七	吉七	吉七	吉七	吉七	吉七

開成舍發行書目

七陽新聞記者富田幸次郎君序文
七佐丸事務員坂本喜久吉君著

雲海紀行

一名土佐丸歐洲航行記

全壹冊 正價拾貳錢
市外郵送稅 四錢

四◎面◎環◎海◎の◎櫻◎花◎國◎戰◎勝◎の◎結◎果◎日◎本◎郵◎船◎會◎社◎は◎非◎常◎の◎英◎斷◎を◎以◎て◎
 州◎航◎路◎を◎開◎始◎す◎是◎れ◎誠◎に◎百◎年◎の◎大◎計◎一◎時◎天◎下◎の◎人◎心◎を◎愕◎然◎た◎ら◎
 し◎め◎た◎る◎豈◎故◎な◎か◎ら◎ん◎や◎本◎書◎は◎乃◎ち◎最◎大◎唯◎一◎の◎土◎佐◎丸◎が◎劈◎頭◎第◎一◎旭◎
 旗◎を◎森◎々◎た◎る◎海◎洋◎に◎翻◎へ◎し◎て◎之◎が◎魁◎を◎成◎た◎る◎航◎海◎紀◎事◎な◎り◎
 其◎香◎港◎の◎市◎況◎錫◎蘭◎の◎靈◎境◎將◎又◎西◎歐◎諸◎港◎工◎業◎の◎遠◎大◎商◎業◎の◎繁◎盛◎な◎る◎况◎ん◎
 其◎同◎船◎事◎務◎員◎坂◎本◎君◎豊◎富◎の◎才◎學◎健◎腕◎の◎美◎筆◎を◎以◎て◎其◎文◎章◎流◎暢◎言◎論◎奇◎
 援◎記◎事◎細◎明◎な◎を◎真◎に◎寫◎し◎得◎て◎妙◎な◎と◎謂◎ふ◎べ◎し◎冀◎く◎は◎購◎讀◎せ◎よ◎海◎

國の丈夫 一たび緋けは鬚髯として眞境に逍遙するの懐あらん

野口寧齋君題詞
宇田滄溟君著

龍上偶語

洋綴美製全壹冊郵稅四錢
正價十五錢

孤憤書を著す、人の心か百年の悲を解識するなし、イザ
天地一切の喜笑怒罵、去て之を龍上偶語に問へ

宮内大臣伯爵 土方 久元君 題字
陸軍中將子爵 谷 干城君 題字
前高知縣知事 石田 英吉君 題字
從四位勳二等 丸岡 莞爾君 序文

前土佐郡長 濱口 眞澄君 序文
前吾川郡長 三浦 一竿君 序文
衆議院議員 小松 三省君 序文
海南學校講師 西森 眞太郎君 跋
翠軒松野尾章行翁 仝儀行君 合著

南海之偉業

一名野中兼山世記

洋綴大形全壹冊紙數百七十余頁
正價金貳拾五錢
郵稅六錢

兼山自筆書翰挿入

●大阪朝日新聞批評古今の學者說一家を成し名天下に著はるもの鮮なからす身匹夫より起りて王者の師となるもの亦之れなきに非ず獨り其學の術と業とを以て之を事實に施し利を後世に遺すものに至りては前代の儒流に之を見ること殆ど罕なり

り野中兼山と曰ふ天資剛邁夙に朱學を修め年僅お二十

三藩の執政お任じ溝洫を通じ荒田を墾し港灣を築き漕運を便にし物産

を殖し其遺澤今に及んで朽ちず誠に偉
 功と謂ふべし兼山の爲す所のもの今日に在りては固より
 企て難うらずと雖も當時在りては卓識秀才の士と雖も尙ほ之を行ふ
 こと能はざりし唯前代に在りて兼山と其蹟相肖たるもの熊澤蕃山とな
 す然れども蕃山の備藩おけるや其功成り身退くに躊躇せざりしなり
 晩年言を献じ將軍綱吉の旨お忤ひたりと雖も壽を以て終り後世其徳を
 議するものおし兼山に至りては然らず政令峻刻
 驕奢人に過く遂に群謗奇禍招きて眩暈の間お死す其跡實
 に悲いべきなり編者其遺業の湮滅せんことを
 を恐れて此編述あり其志洵お美なりと謂ふべし

自由黨總理 伯爵板垣退助君序文
 高知縣中學校々長 澁谷寛君序文

滄溟漁史 宇田友猪君序文
 農商務省技師 澤野淳君演述
 農學士農藝化學士

農業講話

洋綴美本 全一冊
 正價拾二錢 郵税二錢

農國お生るもの、農書を讀ますして可ならんや、農書を讀む、將た先
 づ何に於て之を求むべし。
 簡にして要、切にして實、精にして確、夫れ唯だ農業講話なる哉、夫
 れ唯だ農業講話ある哉。

河田小龍翁著書

土佐 十景 **吸江圖志**

和綴木版全壹冊
 正價金十二錢
 郵税二錢

我海南畫家の秦年として其名八紘に轟き三尺の童子と雖も知得するを
 夫れ河田小龍先生にあらざるや先生は我吸江十景の歳を逐ふて古蹟の埋
 没するを遺憾とせられ明治十一年本書を著述せられ諸先生の題字序跋

詩文和歌等を掲載し資金を吝まらず密書彫刻を以て出版せられたる良書に於て先生か得意の密書と印刷の鮮明とにより非常の好評を得暫時お賢切となり今尙ほ講讀者あるも先生他國せられ再版する余暇なし或翁深く之を遺憾とし弊店へ向け勸告せられ直ちに是れを先生に懇請せり營利的の先生にあらざれば早速お承諾の榮を蒙り今般弊店お於て出版し廣く發賣せんとす江湖各位續々御注文あらんことを

松野尾章行翁製圖

高知市街圖

石版刷 全一折
正價五錢 郵税二錢

高知縣管内地圖

石版刷 全一折
正價三錢五厘 郵税二錢

土陽叢書

洋綴小形一冊讀切
每月一回發行
正價金拾二錢郵税二錢

土陽叢書 第壹編 **土藩大定目**

全三冊 正價拾二錢 郵税二錢

本書は **封建時代** お於ける **土州藩** の法令を蒐集したるものにして綱目大凡三拾九件あり實に **政務家、實業家、考**

古家等の一讀を要すべき良書あり

土陽叢書 第貳編 **山内武功**

全壹冊 正價拾二錢 市外郵税二錢

本書は **天下** 麻の如くに亂れし **天正** 慶長の五千軍 **萬馬** の間に馳驅し **彈矢雨注** の中に入入して **武勳** **赫赫** 遂に **土國** に封せられたる **藩祖** **一豊公** の **武勳** 記事なり。

附するに臣僕の公矢石の間に從ふて奮戦格闘せる經歷を併記せり請ふ御愛求を玉へ

寺石正路君著述

全貳冊正價金

土陽叢書 第三編第四編 土佐遺聞録

貳拾四錢

郵税六錢

本書は土佐の國の風俗、美術、人物、工業、古跡、骨董等に關する歴史上の實談を採録せる者にして文章明暢に材料貴重なる一々精金美玉の如く土佐國の古實を知り歴史を窺ふんとする者は一日も座右に欠くべからざる良書なり

福島鷗波子著述

土陽叢書 第四編 紀貫之

全壹冊正價金拾二錢

郵税二錢

紀貫之は歌仙あり、政治家なり、貫之を景慕する者必ず仙
 歌と稱し政治家たるを知らず。考証正確、議論精識、蓋
 著者茲に感ありこの文を草すし貫之に於ける千古の知己なり文學の士購ひ得て其正否を玩味あれ

寺石正路君著

土陽叢書 第六編 土佐人物傳 上卷 正價拾二錢 郵税二錢

左は土陽叢書の内を以て逐次發行するものかり此段豫告す

安並正晴 兩君評 寺石正路君著述

●土佐古跡巡遊錄 上卷 十月發行

●全 下卷

●●土佐人物傳

中卷

●●全

下卷

富田幸次郎君序文 武市佐市郎君著
松野尾章行翁訂正

●土佐近世商業史

全壹冊

寺石正路君著

●土佐四大地震記

全壹冊

松野尾章行翁著

●白灣往來

全四冊

全翁著

●高知市沿革史

全壹冊

其他諸大家先生の編纂中なれば不日之を發表すべし請ふ諒せよ

『土佐國人名辭書』

予は夙に我土佐の國諸名家の聲名が徒に草野の間に埋没湮滅し去りて人の知るものなきに至るを憂ひ開闢以來三千余年間土佐に關係ある士庶名工藝諸雜家お至る迄苟も有名なる人々は皆之を網羅せんと欲し既に『土佐國人名辭書』あるもの、編輯に従事し明治二十六年以來業に已に五閱年諸名家の事蹟を蒐集せる事二千五百余名の上お出づ近年建碑の事非常に流行せり是實に美譽なりと雖も尙ほ弘く海内に知らしめ芳名を永遠に傳ふるに至つて之を青史お留むるに如かず然らば名家の祖先をして其功績と名譽とを發揚せしめ従つて追孝の理にも當らんらし依つて有名なる人士の子孫知己たるものは其紀傳を容むなく予お寄送せられたし予は快く之を該書中に收むべきなり豫て茲に記して各士に告ぐ

高知市北新町四丁目三番地

武市佐市郎

追白各士の便利によりて予又は開成舎本店へ寄送せられ度編に奉

希望候

尙は各士の都合上もある事ならん程に單に傳記に限らず第一の入用は其人の主要なる事蹟と姓名は勿論の事通稱、字、号、諱、法名、住所

時代、生年月日、死亡年月日、墓所、父母兄弟姉妹師弟の關係、官位爵職、先づ著作あれば書名、名作の品あれば品名、創始せし事あれば其蹟先づ大体は分明なれば宜しく候へ共分明なれば分りし事なれば其書目を御記し被下度候左に今日迄蒐集せし書冊より抜萃せし事なれば供せん然れ共單に是れに限る非ず尙ほ他にあらば寄送被下度候也

國造、國守、國司、目代、介、權介、守、權守、大目、真人、朝臣、據、權據、管、前司、按察司、判官代、探題、守護代、守護職、守護、四家、古城、主、豪族、武士、五人衆、仁井田五人衆、一條四家老、秦三、山内家老、土居預、影、官、忠士、軍人、勤王党、發丑、以來國事難者、戊辰戰死者、西南戰死者、征清役殉難者、書家、儒家、詩家、歌人、狂歌、狂句、俳家、文章家、和文家、國學、漢學、心學、佛學、禪學、神道、易學、聊蘇、故實、小說家、算術家、尺、家、洋書、禮式、論山、長明、義、能、役、者、能、大、鼓、能、小、鼓、要、馬、術、陰、陽、師、天、八、基、抹、茶、插花、鞠、能、狂、言、能、太、夫、太、夫、琵琶、三、絃、一、絃、琴、尺、文、機、巧、發明家、創始家、製造家、經濟家、商業家、銀札發行、事業家、航海家、鑑定家、政治家、武術、柔、劍、弓、師、手、利、劍、鎗、鐵、砲、刀、工、弓、工、紙、家、織、物、家、投、網、高、僧、孝、子、節、婦、賢、婦、貞、婦、忠、僕、忠、婢、奇、童、奇、人、製

順民、復讐、相撲、俳優、出版豫告

松野尾章行翁著 白灣往來

全四册

十月より十二月迄逐次發行す
 題して白灣往來と云ふ之れ九十九洋我土佐の謂なり、本書は松野尾章行翁の著述する者、今般請ふて我土陽叢書に發行するの榮を蒙れり、其記する處尋常一般の記行文に異なり、我土佐の歴史を知り地理を案するの士は本書の出づるを待て知らるべし此段愛願諸君に豫告す

開成舎本店主 片桐猪三郎謹白

植木枝盛自叙傳

近刊

肖像及眞蹟書翰挿入

出版
告版

土佐昔

松村翠陽君著

斷

青木義正君著

長曾我部元親

近刊

長曾我部元親の祖は信州の一元夫に過す而して土佐に入りて國政の衰
 弊に乗し兵を土陽に起し武威雷の如くに震ひ士卒雲の如くに集る玄孫元
 親に至つて形勢癡く張り氣海南を如呑み威中國に加ふと是れ後世噴々
 傳唱せられ三尺の兒童亦偉人傑士として長曾我部元親の
 名を知らざる者なきに至れり然れども其偉人たり傑士たる所以則ち一
 世の真相に至つては正史一も之を詳記するものなく、星霜茲に四百余
 年を経て事蹟往々靡没に歸し當時の狀態茫々として窺知する能はず遺
 憾と謂ふべし著者亦茲に感あり此書を著はすに至れり
 請ふ諸君本書が如何に其人物を寫し、其性行を寫し其閱歷を寫して精
 確詳明なるものなるか本書の出つるを待て知らるべし此段豫告す

開成舎本店主

片桐猪三郎

謹白

東京新聞 昭和十一年三月二十一日

東京新聞 昭和十一年三月二十一日
東京新聞 昭和十一年三月二十一日
東京新聞 昭和十一年三月二十一日

東京新聞 昭和十一年三月二十一日



